

## 資料

A. V. デスニツカヤ  
 「30 - 40 年代のソヴィエト言語学者の諸研究における  
 文類型の諸問題と印欧諸語の主格構造の起源の問題」  
 (ソヴィエト言語学史の中の一章)

メッシャニーノフ期の「新言語学」—能格的文構造・文法的類型論 30-40 年代、能格的文構造 (эргативная структура предложения) の問題は<sup>1</sup>、ソヴィエトの言語学者たちの、程度の差こそあれ「新言語学」(«новое учение о языке») 構想 (同学説の「メッシャニーノフ」型ヴァージョンでの) に共鳴していた人たちの中で特に、非常に大きな関心と呼んだのであった。能格性については多くのことが考えられ、語られ、書かれ、議論された。当然のことながら、他に先駆けてこの問題に関心を寄せたのはカフカース学者たちであったが、彼らにとってはこの問題は、理論的意義にとどまらず実践的意義をもっていた (文字をもって間がない北カフカースの諸言語の学校文法を編纂するという課題に関して)。しかしながら、確かに一定の役割を果たした実践面以外に、能格構文への関心を掻き立てたのは、この問題が、文法的類型論—マール (Н.Я.Март) の死後「新言語学」において目立って優勢になった研究動向—の分野に研究を特化するという指針の確定に直接関連した理論的問題群への活路を示していたからである。

心理的要因—20-40 年代の時期多数の若いフィロロジストたちの学的関心を育てて行く上で一定程度の影響力をもっていたカフカース学の牽引力—にも留意しておかなければならない。この牽引力、カフカースというテーマがもつ一種独特の魅力は、ロシア文化の古くからの伝統の中に根付いたものであったが、それはマールの独特な学的関心と熱狂のおかげで新たな衝動に駆られたのであって、マールのいわゆる「ヤペテ理論」(カフカース諸民族の言語と文化に「ヤペテ語族的」としたマールの名づけに合せた) という初期の自説構築の上で、マールはカフカース諸民族の言語と文化に特別の地位を与えたのであった。

正に、古典の華麗さと多様性をもつカフカース諸語に「能格」構文の名をもつ文法

<sup>1</sup> 「能格構文」«эргативная конструкция предложения»なる概念は説明する必要はないと思われる。この問題は最新のソヴィエトの言語類型学文献に十二分に記載されている。Cf. 完全な文献目録を含む G.A.クリモフ著「能格性総論概説」«Очерк общей теории эргативности» (M., 1973)、また同じく、同著に続くクリモフの諸公刊著を参照。(訳者—このデスニツカヤ論文の露語表題: «Вопросы типологии предложения и проблема происхождения номинативного строя индоевропейских языков в исследованиях советских лингвистов 30-40 годов — Глава из истории советского языкознания»)

構造の見本が現れたればこそ、またこの点でそれが、マールが同じく「ヤペテ語」と呼んで、カフカース諸語と並んで自説において特別な地位を与えていたバスク語に類型学的に類似していればこそ、すなわちこの構造的類似性を媒介にしてこそ、未だマール自身の説明の中では非常にあいまいな性格をもつ言語的段階説が、初めて一層明確な言語学的輪郭像を獲得し始めたのであった。

ソヴィエトの研究者たちが能格性問題の研究において綿密に検討したのは、それ以前の諸研究、中でも H.シューハルト (H.Schuchardt) や C.ユレンベック

(C.C.Uhlenbeck) の諸論文であった。青年文法学派の比較言語学とは独立した立場を取っていたこれらの傑出した学者たちの活動に対して、マール学派の言語学者たちは概ね共感を見せていた。能格性の諸問題に関する彼らの諸見解、とりわけ北米インディアンの諸言語の文構造に関するユレンベックの諸研究は、その後の問題研究—特にソ連邦の生きた口語や文語の諸資料関係の分野での—の起点として利用されたのである。

文類型に関する諸問題や、能格構造と主格構造の手法による主体・客体関係の表現の性格に関する諸問題については、30-40年代のアカデミー会員マール記念言語と思考研究所 (Институт языка и мышления имени акад. Н.Я.Марра) 略して ИЯМ (イヤム ПЯМ) の研究者集団内で特に活発な議論が行われた。「イヤム研究集団の人たち」

(иямовцы) は、これら諸問題について多くの思索を巡らし多くの議論を行なった。度重なる論議と討論の対象となった多数のテーマを抜き出してみることができる：すなわち、能格構文の「能動的」性格と「受動的」性格；当該言語における能格構文の現実性あるいは残滓性—一定の思考タイプを反映する「能格構造」と、質的に新しい内容を充たして機能的には主格構文に一致し得る「能格構文」との間の差異という、もっと一般的な問題提起に関する問題；主体・客体関係の能格型表現タイプは段階的に主格型タイプに先行すると見なしうるのか？能格構造から主格構造への変換の諸路線。如何なるタイプの文構造が能格的文構造に先行し得たのか。能格構造と主格構造の初期段階位相 (early phase) と後期段階位相 (late phase)。相関関係にある思考の発達と統語構造の発達；その両者間に一定の連関性がありやなしや。能格型と主格型の文における主体・客体関係の表現の性格。実際の主体 (subjects)、客体 (objects) と文法的主語 (subjects)、補語 (objects) との相関関係；agens と patiens、それらの表現。動詞述語の性格—他動性と非他動性 (自動性)、行為動詞と状態動詞。態 (залог [voices]) の問題—その問題と主格構造の発展との相関関係。格と、格と一定タイプの統語構造との関係。こうしたものが、絶えずその範囲を広げて行った具体的諸言語資

料に合せて提起された基本的諸問題である。カフカース諸語以外で研究対象となつて行つたのは、北方諸民族とアメリカ・インディアン諸族の諸言語であつた。印欧諸語における前主格構造の痕跡の研究に関連して、これら印欧諸語の「能格的過去」論争が行なわれた。この問題こそ實質的に統語構造の段階的変換問題全体の解決にとっての主要問題であつた。

**30年代期の最重要諸研究** 30年代の時期の能格論の研究において最も重要だと考えられる出来事は、以下のものである：a) A. A. ボカリヨフ (A. A. Бокарев) の諸研究におけるアヴァール語資料に基づいた能格性の研究—彼の研究「アヴァール語他動詞の『受動的性格』について」(1934年学位論文)と1941年初めには脱稿していた「アヴァール語統語論」(彼の死後1949年に公刊された)；b) S. D. カツネリソン

(С. Д. Кацнельсон) の研究「主格文の起源によせて」(1935年の学位論文、1936年著作)；c) I. I. メッシュャニーノフ (И. И. Мещанинов) の諸労作「新言語学 段階的類型論」(レニングラード、1936年)と「一般言語学 語と文の発達における段階性的の問題によせて」(レニングラード、1940年)。

**ボカリヨフ** アナトーリー・ボカリヨフ (Анатолий Бокарев) の研究は驚くべき緻密さと深い言語学的分析を含んでおり、その研究では能格的文構造をもつ言語の統語組織(システム)を記述するという課題が解決されたのであつた。著者は、母語話者との共同作業で綿密に検証した文学やフォークロアの原資料から抜粋した膨大な資料に基づいて、表現される行為の方向づけ (orientation) に関係する、動詞述語の性格に応じて区別された数タイプの述語構文の実際的機能を提示したのである。主語・述語関係(主体・述語関係 subjective-predicative relation) および主語・補語関係(主体・客体関係 subjective-objective relation) の様々な伝達法が表現する次のような述語構文タイプが区別されている：1) 自動詞述語をもつ文、2) 他動詞述語をもつ文、3) 感覚動詞が表す述語をもつ文、4) 知覚動詞が表す述語をもつ文、5) 他動詞の自動詞的用法と自動詞の他動詞的用法、6) 述語としての持続アスペクト (длительный вид [durative aspect]) 動詞、7) 述語としての使役態 (понудительный залог [causative voice]) 動詞、8) 述語の役割での分詞、9) 合成述語と、その関連諸現象。

このようにして、他動詞と特別能格 особый эргативный падеж (能動格 активный падеж [active case]) の主体 (subject) をもつ本来の能格構文が、アヴァール語に存在する主体・述語関係と主体・客体関係の表現法の広い展望の中で姿を現したのである〔記者注：ここでいう「特別能格」＝「能動格」は、斜格の意義をもつ一般能格[＝兼務能格]と区別される主体格専用の能格、いわゆる「専用能格 специальный эргатив (special

ergative)」を表す]。能動格（能格）もまた全く同様にして、格組織体系全体を背景として、またこの格がもつ諸機能—他動詞構文における主語と補語（行為の道具ないしは手段の意義での）—の相関関係の中で、提示された。また与格（dative）や所格

（locative）に対しても、一定の意義の動詞述語の下では主語を表す、それらの格が有する機能と、それらの格のそれ以外の機能（様々なタイプの補語や状況語の機能）との相関関係が提示された。能格的統語法にとって決定的である、他動詞構文と自動詞構文の対立という不変の厳格な規律を壊すようなケースの分析によって、著者は共時的な記述システムの中にそれのもっと深層的な通時的背景を解明することができたのである。そこで、他動詞の自動詞的用法と自動詞の他動詞的用法に関する章で、ボカリョフは次のように書いた：「このパラグラフで触れた動詞の意義の二重性は、勿論、偶然のものではあり得ない。これは、語彙的かつ統語的に同一である動詞の中に、対立する統語的（またいくつかのケースでは、語彙的）意義が発達してくる結果としてのみ説明することができる。二つの異なる意義が同一の音形の中に重なり合うことから、現在の動詞の二義性越しに、今日支配的である他動詞と自動詞という動詞区分に覆い被さっているもっと古い関係が覗いているという推定の確度が高くなるのである。この二義性の歴史的基礎にあるのは、明らかに他動性と非他動性の区別の欠落であろう。いくつかの動詞の中には後統語期において自動詞として固定されたものがあつたが、しかし、それら動詞の他動的用法の可能性は、かつてはそれらが他動性と非他動性の点で区別を欠いていたことを表すものである。別の動詞は、他動詞として固定されたが、自動詞としてのその用法は、同じ区別の欠落を指し示している！」<sup>2</sup>。

カフカースの諸言語に特徴的な能格構造の本質と起源の理解にとって非常に重要な意義をもつのは、構文タイプとアスペクトの意義の間の関連性の発見であつた。アヴァール語他動詞の特徴の一つは「持続的行為を表す必要がある場合には、それが自動詞になるという点である」<sup>3</sup>、とボカリョフは書いている。

ボカリョフが厳密な統語的概念と用語によって行なつたアヴァール語能格構造の記述に比べて、彼の同時代の多くの記述は、同様の構造に関する後統語期のいくつかの記述も同じく、皮相で不完全である点は、指摘しておいてよいかもしれない。

**カツネリソン** カツネリソンの修士論文「主格文の起源によせて」«К генезису номинативного предложения»は、若き学究が即理論家としての天分を認められた研究であつたが、これは統語範疇の史的類型論の問題を扱つたもので、言語発達の段階性

<sup>2</sup> Бокарев А.А. Синтаксис аварского языка. Л., 1949, p.47.

<sup>3</sup> Ibid., p.29.

に関するマール説を基底に据えた構想であった。論者は、同研究において、現在世界の大多数の諸言語に現れている主格構造の出現には能格構造一文の発達におけるより初期段階としての一が先行したはずだ、という命題を展開したのである。こうして、能格性の普遍的性格が確定されて行ったのである。能格構造から主格構造への移行を、カツネリソンは、意識の発展における一定のシフトを反映した「大規模革命」（«грандиозного масштаба революция»）<sup>4</sup>、と特徴づけたのであった。能格構文は、形態的発現の違いが如何にあれ、「多数の言語に追跡される」という事実は、偶発的狀況がこの構造を生み出したのではなく、同構造は文の発達において共通の意義をもった段階であることを示している」<sup>5</sup>。文類型の諸問題に対する段階的アプローチは、次の言辞にはっきりと表れている：「多種多様な組織体系（システム）をもつ諸言語の文構造を比較してみると、形態論的な形式化が異なろうとも、同一の社会発展段階におけるそれらの意味的かつ統語的内容の均一性—人間の思考の起源と発達の一体性にに基づく均一性—が明らかなる」<sup>6</sup>。

文献にあった諸記述を使って、カツネリソンは、最大限にシューハルトの諸研究や特にユレンバックの諸研究に依拠ながら、能格構文の基本諸特徴を説明し概要をまとめていく。「意識史の分野への補説（原始的意識における客観的なものと主観的なもの）」«Эккурс в область истории сознания (Объектное и субъектное в первобытном сознании)»は、原始的思考の特徴に基礎をもつ、能格的文構造の始原的な意味原理を確定すること、すなわち能格構文の「観念形態（ideology）の内容」を提示することを目的としたものであった。

カツネリソンは、能格構造の発生を、諸物の活動（действия [actions]）能力（活力）についての概念の生成に結び付けたのであり、加えて、その活（動）性（действенность）は諸物が内在的に具有する性質としてでなく、諸物にとっては、自己の意志に反して諸物が陥る偶然の状態、として考えられるものであった。この偶然性、物に対して外部から現れ来る性質としての活動の非内在性の中に、彼は「活力源（действенное начало）の担い手」として登場する諸物の性質についての原始的表象を顕す、何か「マナ mana」（[訳者]宇宙に遍在する超自然的な力、ポリネシア民族などの信仰に見られる）あるいは「オレンダ orenda」（[訳者]イロコイ族が信仰する、万物に

<sup>4</sup> Кацнельсон С. К. Генезису номинативного предложения. Л., 1936, p.103. ([訳者] 同論文は2010年に再版された次の著書では p.111 — Кацнельсон С. Д. Историко-грамматические исследования, Петербургское лингвистическое общество, Санкт-Петербург, 2010, с.111)

<sup>5</sup> Ibid., p.63. (2010年再版書 p.71)

<sup>6</sup> Ibid., p.9. (2010年再版書 p.18)

宿る魔力・霊力)の觀念に似たものを見出したのであった。こうして、彼はユレンベックに続いて、行為主体の能動格 (active case) をもつ能格構文の生成過程において決定的要因になるのは、諸物を「能動」物と「受動」物に分つ、原始的意識が作り出した区分であったはずだ、と考えたのである。

カツネリソンは、他動詞能格構文の最も明確な諸特徴の一つ—アゲンス *agens* を斜格に属する特別能動格 *особый активный падеж* (能格) に措定すること—を、かなり漠然と活動力の外的因子に関連づけたのである。カツネリソンは、全体として、ユレンベックが提起した説明—「活動物の能動性 «активность действующего предмета» を決定する隠れた力の流出 (эманация [emanation]、したがって «casus energeticus 活動格 = casus emanativus» 流出格」という説明—は、能格構造の他動詞文の構造化に宗教的因子を持ち込むものと見なして否定したのであるから、人あるいは物の「活動性」の「外的な」性格のおかげで「純粋な物体観にある新しい関係が付け加わった」という彼の解説は依然として不分明のままである<sup>7</sup>。

結果として、能格構文にとって特徴的な、他動詞述語の下での斜格主体をもつ構文、の発生は、実質上未解明のまま残ったのである。全体として、能格構造の特徴を規定する文法的諸事象の集合総体は、能格構造の属性の中に、カツネリソンがその「補説」«Экскурс» (excursus) において再現しようとした段階から派生した原始的意識に由来する十分な証拠を得られなかったのである。姿を顕して来たのは、各種の残滓的諸事象にその痕跡を見せることがある、本質的に別の「前主格」的文構造の単なる輪郭にすぎなかった。

カツネリソン構想の中で極めて重要な契機になったのは、彼が行なった「現実的」能格性 «актуальная» эргативность («actual» ergativity) と「残滓的」能格性 «пережиточная» эргативность («remnant» ergativity)、別言すれば、世界の多数諸言語に残った能格構文 (эргативная конструкция) と、より原始的な意識水準に照応する、より初期の社会発展段階に存在した「能格構造」(эргативный строй) の峻別であった。「何れの構文 (конструкция) も文の構造 (строй предложения) と混同してはならない。世界の大多数の諸言語における文の構造は、主格構造である」<sup>8</sup>。この観点からすると、北部カフカース諸言語における能格構文もカツネリソンの考えによる印欧諸語 (やその他諸言語) に現れる能格構造の諸特徴も残滓的なのである。

カツネリソンの研究の大部分は、印欧諸語 (特にゲルマン諸語) における「能格的

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.92. (2010年再版書 p.101)

<sup>8</sup> *Ibid.*, p.103. (2010年再版書 p.112)

過去」の痕跡を扱ったものであった。彼が析出した諸事象が、能格的文構造の段階の普遍性という命題をどの程度証するものであったか、については以下で取り上げることになる。

能格性の諸問題の研究史においてカツネリソンの著書「主格文の起源によせて」は、何よりも先ずその理論面において、また文法的諸範疇の歴史的意味の面からのアプローチの点で、重要である<sup>9</sup>。同著は、多年を経て後カツネリソン自身が「内容的」類型学 («содержательная» [контенсивная] типология) と呼んだ、文法研究路線の発展過程における確かな一歩であったことは認めてよいことである<sup>10</sup>。

**メツシャニーノフ** 文構造の段階的類型論は、30年代の中頃からメツシャニーノフの諸報告、諸論文、諸著書の基調的なテーマとなり、正にそれによって、いわゆる「新言語学」(новое учение о языке) の歴史における「メツシャニーノフ」期を拓くことになった<sup>11</sup>。彼が発展させた研究動向は、我が国における言語学研究に対して強い影響を、また全体として肯定的な影響を及ぼし、文法的諸範疇の内容面に特に注意を向け、文法諸範疇の発生と機能化の歴史的法則性の解明に狙いを定めて、言語構造の共時的研究と通時的研究の活発化を促したのであった。

1934年の綱領的報告において、メツシャニーノフは、「言語内諸事象」の研究課題を定式化したのであるが、それは「個々の諸言語の知識を深めること」および「直接、言語諸事実に」足場を据えることが不可欠であると考えたからである<sup>12</sup>。彼が定めた理論面における言語学研究の課題は、はっきりと文法的諸事象の史的類型学の諸問題に目標を置いたものであった：「各種の文法的諸範疇の発現や語中でのそれらの外面的発現の意義や原因を解き明かすことができるのは、…言語的起源的 (glottogenic) な過程の同一性も、時間と空間における即ち連続的に交替して行く諸段階や共時的な言語的集合化 (グループ化) でのその (言語起源的な過程の) 発現の多様性も考慮した歴史的アプローチによって初めて可能となる」<sup>13</sup>。

<sup>9</sup> カツネリソンの研究の公刊が引き起した関心を証するのは、«Museum, Maandblad voor Philologie en Geschiedenis» (Leiden, 1937. N.9, p.226-227) に載った、能格論の創始者の一人であるユレンベックの書評において彼が受けた肯定的評価である。

<sup>10</sup> Кацнельсон С.Д. Типология языка и речевое мышление. Л., 1972, p.11. (URSS [ЛИБРОКОМ], 2009年再販された)

<sup>11</sup> マールが自説に以前与えていた「ヤペテ説」«яфетическая теория» という名称に代えて示した「新言語学」«Новое учение о языке» という名称は、30-40年代には根強く残り続けていた。尤も、マール自身の言語学説の具体的命題に対する引用は益々形式的性格を帯びて行き、彼の言語分析の方法(「四要素」による)は実質的にはもはや誰も使わなくなっていたのであるが。

<sup>12</sup> Мещанинов И.И. Проблема классификации языков ив свете ноиого учения о языке. (新言語学に照らして見た諸言語の分類問題) — 1934年2月12日の科学アカデミー年次祝賀会で行なわれた講演, Л., 1935, p.5.

<sup>13</sup> Ibid., p.35.

同報告の中で、メッシュャニーノフは初めて、能格構文を段階的現象とする解釈を提起し、能格構文の形式的な残滓は主格的文構造をもつ諸言語に残るという構想を発表した。彼はユレンベック説に依拠しながら、能格構文の起源の説明をユレンベックが当時「魔法的」(magic)と定義した原始的思考の性格の中に求めたのである；彼は言語諸構造の歴史的資料の中に、論理的思考規範に相応した古い文法形式の連続的な再編と再解釈の段階位相(phase)の堆積物を見出したのである。

この綱領草案を実行した著書が「新言語学」であって<sup>14</sup>、これはレニングラード大学文学部で1934-1935年に講ぜられた連続講義を基にして成ったものである。この労作の中で、主体・客体関係の表現の歴史的類型論の問題が、研究が進んでいなかった多数の諸言語の生の資料を使って初めて研究されたのであった。いくつかの北部カフカース諸語(アブハズ語、レズギン語、アヴァール語、ダルギン語、ラク語、ウディン語)以外に、古アジア(paleoasian)諸語(アレウト語、ユカギル語、チュクチ語)も分析対象となったが、これら古アジア諸語は言語学の理論問題の提起と解決のためにメッシュャニーノフが初めて資料として使ったものである。上記の諸言語の他に、研究対象になったのは、ネメプ語(неме́пу, ネズ・パース語 Nez-perce)(北米インディアンのサハプチン語族の言語)、ウラルトゥ語、また南カフカース諸語(同諸語は、能格構文の、主格的統語法の規範への再編モデルと見なされていた)の文構造であった。

この研究段階では、メッシュャニーノフは、次のような段階時代区分の構想図を提起していた：1) 能動的・神話的(能動・受動)段階、2) 受動的(受動的能動化)段階、3) 能格(形式的受動)段階、4) 能動的段階、あるいは能動・論理的(形式的・能動的)段階<sup>15</sup>。

メッシュャニーノフにとって独自・独創的な実験室であったのは、30年代の後半に彼が行なった、レニングラード大学文学部の学生や大学院生達に対するゼミナール授業であるが、この授業の進む中で、諸言語とりわけ北の諸民族の文法構造の分析が深められた。

古アジア諸語は、メッシュャニーノフのかねてからの学的熱中の対象となっていた。同諸語はその文法構造が一種独特の諸特徴をもつために特に彼の関心を喚起したのであるが、彼はそこに段階的により早期の状態の特徴を見出したのである。これら諸語

<sup>14</sup> Мешанинов И.И. Новое учение о языке. Стадиальная типология. Л., 1936.

<sup>15</sup> Ibid., p.329 & seq. (訳者—cf. クリモフ「ソ連邦における類型学研究(20-40年代)」—名大科研報告2002年—p.270 [原著 Климов Г.А. «Типологические исследования в СССР 20-40-годы», p.46] の解説によれば、カッコ外は類型 type、かつこ内は思考タイプ段階 stage。例えば、能動・神話型(能動・受動段階) …のように)。

に取り組んだ結果として、メッシュャニーノフが提起したのが、新しい研究テーマ抱合 (incorporation) の問題一であった。抱合問題を精査して行く中で、大きな理論的意義をもつ問題一諸言語の文法構造の始原的発達段階としての「単語文」«слово-предложение» (word-sentence) 一が提起された。これらの諸問題自体はすでに言語学史上に発生していたが、それにも拘らず、古アジア諸語の原資料に基づいてメッシュャニーノフの研究で展開されたこれら諸問題の史的類型学的解釈は、言語起源論的諸問題の研究において新しい結論であった。著書「一般言語学」の中で<sup>16</sup>、彼が定式化したのは、語と文の発達（それらの歴史的相関関係）における段階性問題の研究という課題であった。この問題に照らして、文の構成部分としての抱合的複合体についての問題、古アジア諸語における統語的複合体（語結合）についての問題、また同じく動詞の形成に関連する動詞文の生成についての問題、が検討されたのであった。

主格文の生成過程の問題は、独自の意義をもち続けていた。しかしながら、前主格段階の特徴づけは、新しい資料が目だって豊かになった。能格的文構造と並んで、所有的文構造、情緒的文構造、場所的文構造も考慮されるに至った。

1940年に公刊された「一般言語学」は、戦後の初期数年の史的類型学的研究に大きな影響をもたらしたのである。

**イヤム研究所内 ゲルマニスト・グループ** 30-40年代に史的・類型学的研究の独特の潮流を見せたのは、言語と思考研究所のゲルマニスト・グループの研究者たちが行なった印欧諸語の文法構造の早期発展段階の研究である。この潮流の特徴は、印欧語比較言語学の資料と方法を用いて、段階的・類型学的構想と印欧語比較言語学の分野での具体的研究とを結合したことであった。こうした結合に内的矛盾は存在しなかった。当時祖語に関するテーゼは断固として否定されていたけれども、印欧諸語（とりわけ古代）の統語的組織体系において主体・客体関係の表現を担う文法範疇の起源と発達の諸問題は、印欧諸語の歴史的共通性を認める範囲内で提起され解決されていたからである。

古代の印欧諸語の文法構造には、その遠い過去に文法的諸関係の何らかの別タイプの表現、別の性格の文法諸形式やその諸形式の相関性と機能が存在した可能性を示す根拠を示すいくつかの事象が存在するという問題提起そのものについて言えば、こうした研究上の思潮は、決して印欧語学にとって無縁のものではなかったのである。

XIX世紀末からXX世紀初めの実証主義的比較言語学の原則遵守に厳格な代表者たち

<sup>16</sup> Мешанинов И.И. Общее языкознание. К проблеме стадильности в развитии слова и предложения. («語と文の発達における段階性問題によせて») Л., 1940.

の諸著述にさえ、印欧語文法構造前史への道草 (excursus) が見られることがある。例えば、メイエ (A.Meillet) は、「かくも完ぺきに屈折的な印欧語タイプ越しに、ほとんどあるいは全く変化しない形をもつもっと早期タイプの存在が透けて見えるが、合成語の初めの構成部分とか中性の主・対格形がこのタイプの名残りである」、と書いたのである<sup>17</sup>。同じような仮定はブルクマン (K.Brugmann) も認めている<sup>18</sup>。その同じブルクマンは、中性 -o 語幹単数主・対格の -m 指標が男性と女性の全語幹の単数対格に共通の -m 指標と一致するというよく知られた事実を、「原初に -o-m 中性形は、名詞観念がエネルギー (活力) を失った受動的な状態だけを表したのだ」という意味で解釈したのであった<sup>19</sup>。

XX 世紀の比較言語学においては、「不定格」«casus indefinitus»の残滓、異語幹屈折語 (heteroclisys, Heteroklikikon)、補充法 (suppletion)、限定辞 (root determinative)、他のような印欧語形態論の諸事象が、史的類型学分野での注視の対象となった。この種の諸事実を基にした再構は、より原始の言語状態からの発達という思想を (必ずしも常にという訳ではないけれども) 暗に前提としている。西欧の比較言語学においては、この種諸事実やそれらに基づいた仮説への関心が、今世紀 (20 世紀) の中頃には目に見えて強まって行ったのである (バンヴェニスト É.Benveniste やクリウォーヴィチ J.Kuryłowicz 他の諸研究)。

文字記録の時点からのあらゆる古代印欧諸語にはっきり文証された主格的文構造の起源に直接関係する諸仮説にも事欠くことはなかった。ユレンバックは早くも 1901 年に、-m 対格と中性 -o 語幹の -m 指標との一致という上記の事実に基づいて、印欧諸語の格組織体系 (格システム) は、別類型の主体・客体関係の構造、すなわち active (能動格) と passive (受動格) の対立に基づく類型に遡及する、とする推定を発表した<sup>20</sup>。1914 年ファン・ウェイク (N.van Wijk) は初めて、単数主格 (男性および一部女性名詞の) 語尾 -s と属格語尾 -s との原初的関連性についての仮説を提起した (一度ならずその後も繰り返して)。論者は、-es 語尾をもつ古代の「能動格」(active case) の存在を考え、それが分化した結果独立した二つの格—主格と属格—が形成された、と

<sup>17</sup> Meïe A. Введение в сравнительное изучение индоевропейских языков. М., 1938.

<sup>18</sup> Brugmann K. Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen. Straßburg, 1904, S.299.

<sup>19</sup> Ibid., p.361.

<sup>20</sup> Uhlenbeck C.C. Agens und Patierns in Kasussyntax der indogermanischen Sprachen. – Indogerm. Forsch., 1901, Bd 12. See 次の訳書«Эргативная конструкция предложения»(М., 1950). – 同じく次を参照: Rodenbusch E. Bemerkungen zur Satzlehre. – Indogerm. Forsch., 1906, Bd 19, S.254-263; Томсон А.И. Происхождение форм именительного и винительного падежей и грамматического рода в индоевропейском языке. – Изв. ОРИАС Акад. Наук. 1913, т.XVIII, кн.4, с.148-172; Brugmann K. Die Syntax des einfachen Satzes in seinem Indogermanischen. Berlin, Leipzig, 1925, S.43.

仮定した<sup>21</sup>。同じような再構はペザーセン (H. Pedersen) も提起したが、これは印欧諸語の「能格的過去」仮説を提起したユレンベックとは別に提起したものである<sup>22</sup>。すでにクリウォーヴィチは30年代に、ユレンベック・ファン・ウェイク仮説に与して、ファン・ウェイク構想に類似した、主体・客体格の原初的相関関係の再構を提起し、それを自分が研究したアクセント再編論と形態的派生論の助けを借りて論証しようとした<sup>23</sup>。

**ソヴィエト・ゲルマニストの特徴** この問題の歴史が示しているのは、30年代に印欧語主格文構造の歴史的原点に関する問題の研究に取り組んだソヴィエト・ゲルマニストたちの関心は、比較言語学の伝統から離れられなかったことである。しかしながら、彼らの諸著作で本質的に新しかったのは、文法的諸事象の意味面への高い関心の増大と統語的アプローチであり、このアプローチによって、研究対象とする諸形式（例えば格の諸形）を、パラダイム内でのそれら諸形式間の相関関係（クリウォーヴィチ構想におけるような）においてだけでなく、それら諸形式の機能体系（システム）の中で観ることができるようになったことである。

比較言語学の方法と「段階的言語史」、別言すれば史的類型学的アプローチとの合体の学的有効性を強調して、当時ジルムンスキー (В.М. Жирмунский) は次のように述べた：「段階的言語史への道は、比較文法の中を貫いている」、と。さらにまた、「起源的な比較文法は、類型学的な比較文法に基礎を置かなければならない」、と<sup>24</sup>。

印欧語文の主格構造の起源問題の諸研究が集中したのは、印欧諸語において歴史的に証される主格構文が如何なる文タイプ（文型）から発達したか、という問題をめぐってであった。能格的文構造からか？あるいはまた、何らかのある別タイプの文構造からか？

印欧諸語の「能格的過去」説を発展させたて行ったのは、カツネリソンとグフマン (А.В. Гухман) の諸研究においてであった。彼らと違って、デスニツカヤは、古代印欧諸語の諸事実のさらに深くかつ広範詳細な研究、特に対格の古い意味の研究や、また動詞の他動性と非他動性範疇の対立の性格の研究からも、これら諸語における主格

<sup>21</sup> *Wijk van N.* Der nominale Genetiv Singualr in Indogermanischen in seinem Verhältnis zum Nominativ. Zwolle, 1902.

<sup>22</sup> *Pedersen H.* Neues und Nachträgliches. – *Zshr. F. Vergl. Sprachforschung*, 1906, Bd 40.

<sup>23</sup> *Kuryłowicz J.* Études indo-européennes. Kraków, 1935, s.162 & seq.

<sup>24</sup> *Жирмунский В.М.* Сравнительная грамматика и новое учение о языке. – Изв. ОЛЯ АН СССР, 1940, № 3, p.59. Жирмунский自身は、次の諸論文で文法範疇の起源と発達の諸問題研究に際して「段階的・類型的比較」のモデルを提起した：«Развитие категорий частей речи в тюркских языках по сравнению с индоевропейскими языками» (Изв. ОЛЯ АН СССР, 1945, № 3-4), «Происхождение категории прилагательных в индоевропейских языках в сравнительно-грамматическом освещении» (Изв. ОЛЯ АН СССР, 1946, № 3).

構造の、能格構造からの発展を示す証拠が得られない、と考えたのであった。

早くも 30 年代に書かれ、発表されたカツネリソンの「主格文の起源によせて」の研究やグフマンの「ゴート語動詞の構造の起源」の研究は、今日までも依然として、文法的意味の分析の点で、印欧諸語の先史的過去における「能格段階」説の論証に挑んだ最も大規模な試行であるのだから、彼らの試行内容について振り返って観るべきであるが、後に続くこの仮説の支持者らは、どうやら必ずしもその具体的研究に分け入った訳ではなさそうである。

**カツネリソン「主格文の起源によせて」** カツネリソンは、能格性一般論に関連してすでに上で話題にした自著の中で、「印欧諸語における主格的文構造の出現に先立って能格構造があった」とする仮定を認めたユレンベック、シューハルト、マール、メッシュャニーノフの諸研究を引用することから問題の検討を開始している。そこで、彼は続けて次のように述べる：「概ね、文の発達において少なくとも三つの段階、すなわち能格構造段階、古代型主格構造、その中から生ずる現代型の文の輪郭が浮かび上がった」。彼はこの自分の論文で、「能格構造から主格構造への変換の問題」を扱ったのである。彼は、「消失してしまった古体的（アーカイックな）構造を証明し得るようなこと全てを明らかにする目的で、主格構造の基幹的諸範疇を研究することによって」、先達の論者等が行なった論証を発展させるべきだ、と考えたのである<sup>25</sup>。

カツネリソンは、自分の研究を主として古代ゲルマン諸語の資料を基に構成して<sup>26</sup>、これら諸語の形態法と統語法の中に印欧語のより早期の状態に遡っていくつかの古体的（アーカイックな）諸事象を析出した。ただし、これら諸事象を、主体・客体関係の能格的表現図式の段階的法則性についての、論者にとって起点となる命題を裏付けられる解釈ができるかという、疑問の余地がない訳ではない。

研究にとって特に関与的な能格性の残滓として取り上げられたのは、人称代名詞の補充法 (suppletion)、非人称構文 (無人称構文)、-to-, -no- 接尾辞を付す態 (voice) と分詞の範疇であった。

古代ゲルマン語の人称代名詞パラダイムを扱った、極めて内容が濃いそして興味深

<sup>25</sup> *Кацнельсон С. К* генезису номинативного предложения. Л., 1936, p.7. ([訳者] 再販書 *Кацнельсон С.Д.* Историко-грамматические исследования. «Петербургское лингвистическое общество», Санкт-Петербург, 2010, c.16)

<sup>26</sup> 論者の専門分野を動機とするゲルマン諸語の選択は、当時マールが、ゲルマン諸語はヤペテの状態から印欧語状態への過渡的言語、と表明したその特別の関心に合致するものであった。次の論文「ヤペテ説の研究における転換点」《Новый поворот в работе яфетической теории》(*Март И.Я. Избранные работы*, т.1., Л., 1933)を参照。ゲルマン諸語の古体的（アーカイック）諸特徴についてのマールの基本的な考え方は、ある程度、言語と思考研究所の研究者たち—ゲルマニストたち—の、ゲルマン諸語の分野における比較・歴史研究への指針の一因となった点を、見て取ることができる。

い章において、論者は確かにこのパラダイムの古体的（アーカイックな）性格を巧みに描出することができている。しかし、これは、かつて印欧諸語に能格構文が存在をしたという主張を裏付ける証明にはならなかった。

カツネリソンは、非人称構文に関する章で、非人称構文はその発生時点頃には、「当時の思考規範では、主体は直接的には与えられていないか二次的・二義的なものとしてのみ与えられた場の表現に用いられており、しかも、意識は必然的に各思考行為毎にすでに主体が存在することを前提としている」と指摘したのである<sup>27</sup>。さらに、彼は、非人称構文は能格構造の残滓と見なすべきではないことを、また非人称構文の発生は、すでに完成済みの主格主体の存在に関連していることを、認めている。正にその故にこそ、非人称構文は生成されつつあるかすでに生成済みの主格構造の範疇であり、能格段階説を証する証拠にはなり得ない。実際、論者は、非人称構文に対して自分の結論を述べながらもやはり、「このことによって、我々の問題にとって非人称文の意義がいささかも減ずることはない。非人称構文は主格構造の原初の発生期に我々を引き寄せる糸口をもっており、それが主格構造が比較的晩成であることを指示し、また主格構造発生のいくつかの局面や発生条件に光を当てるからである」、と指摘している<sup>28</sup>。

だが、ともかく、主格構造の歴史的な性格に関する主張そのものが、また主格構造に先行して、条件的には前主格構造と称することができる何らかの別の、類型的にもっと古い表現タイプの統語関係が存在したという主張そのものが、疑念を引き起こすことはなかったのである。この観点からして、非人称構文の発生、役割、意義に関する問題は、一定の関心を呼ぶはずである。まして、この問題には多数の印欧諸語（特にイタリア諸語やケルト諸語）における中受動（*medio-passive*）範疇の形成に関する問題が関係しているからなおさらである。とはいえ、ご覧のように、このカツネリソンが取り出した諸事象の内の第二の事象—非人称構文—も、前主格構造が能格的文構造式の特徴そのものを示すという推定を裏付けることはできなかったのである。

前主格構造の残滓を明らかにする目的で彼が研究した第三の文法範疇は、ヴォイス（態）であり、中でも特に過去分詞のヴォイスの二重的性格である。

カツネリソンは、印欧諸語における主格構造の最終的完成段階を受動態の形成に結び付けて、ヴォイス（態）範疇の意義を恐らく主格的文構造を組み立てる基幹の局面の一つと見て、ヴォイスの意義の評価を改めたのであろう。ヴォイス（態）の意義は

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.36. (2010年再販書 p.45)

<sup>28</sup> *Ibid.*, p.36-37. (2010年再販書 p.46)

本質的な意義ではあるけれども、しかし決定づけるものではない。

周知のように、主格的文構造と能格的文構造の違いを決定づける基本特徴は、他動性か非他動性化に関わりなく、表現される行為の性格が異なる動詞の下で主体の区別をしない、という点にある。ヴォイス（態）の発達は、主格構造の性格付けに補助的な契機（モメント）を付与したにすぎず、動詞述語タイプの多様性を増大させたり、正にそのことで主体の普遍格としての主格の機能を極限にまで肥大化させたのである。したがって、個々の印欧諸語や印欧諸語の歴史における個々の諸段階は、動詞述語の諸タイプの分化程度において、また主格構造の発達における個々の諸段階の特徴を構成するその他多数の諸特徴においても同様、互いに異なっている。ただし、主体の普遍格としての主格の基本特徴はすでに到る所で現れ、しかも言語に個々の印欧諸語で概ね不均等発達を見せるヴォイス（態）範疇の有無に関わりなく現れるか、あるいはまた、指示される行為の異なる性格（他動性と非他動性、行為と状態）を表す動詞述語の区別が語彙的にのみ与えられているか、何れかである。

カツネリソンの主たる注意は、*-to-*と*-no-*接尾辞を付す完了分詞のヴォイス（態）の二重性に集中しており、彼の考えでは、その形態的構成中に、受動的意義を有する代名詞指標 *-t-*と*-n-*を仮定したのである。彼は、これらの分詞を、能格構造の動詞形の直接的残滓と見なすことができると考えた。しかし、*-to-*と*-no-*接尾辞を付けた分詞の意義と用法の分析は、カツネリソンが提起した仮説を承認する根拠を示さなかった。これらの接尾辞を付す印欧語分詞は、始原的には対応の動詞と表示される特徴が共通であることで相連係する形容詞であった。「能動性」と「受動性」の意義は、始原的には基本的に語彙的に規定されるものであって、動詞の意味次第であった。これらの範疇の文法的対立は、受動態範疇の形成に関して初めて、このタイプの分詞に及ぶのであって、決して論者が仮定した「能格段階」からそうした状態で継承したものではない。したがって、*-to-*と*-no-*接尾辞付きの形容詞の意義は、その歴史的説明のために能格構文をもち出す必要はない。正にこのことから、カツネリソンが、印欧語文の前主格構造が能格構文の存在を特徴としていたという仮説の論証に最大の意義を付与した論拠の証拠能力は破綻するのである。

カツネリソンが分析対象とする諸現象は、古代印欧諸語の文法構造の他の多数の諸要素と同様、比較の方法によって後期印欧語状態に対して再構される構造の成立に先立つ言語状態の多少の諸特徴を再構する土台を示してくれる。彼の研究「主格文の起源によせて」は、具体的にその言語学的結果としては印欧諸語の過去に能格構文が存在したという論者の最初のテーゼに一致しなかったけれども、全体として彼が「古

代型の主格構造」として指示した言語状態に特徴的な文法的諸現象の意味的解釈を深化させかつ広げたのであった。それ故、古代ゲルマン諸語の研究分野における彼の関心が、その後正にこの問題に向って行ったことは、恐らく偶然とは考えられまい。論文「部分的限定語の歴史によせて」<sup>29</sup>—後に著書「歴史的文法研究」<sup>30</sup>に所収—は、その主要部分は戦前期に書き上げたもので、ポテブニャ (A.A.Потебня) の文法観への熱中の余韻の跡を残すものであったが、カツネリソンはその論文において、古代アイスランド語の文学的記念碑 (エッダやサガの歌謡) の言語を研究したのである。彼の関心の対象であったのは、「古代語」の統語法における「古体的 (アーカイック) 主格構造」の諸特徴の現れであった。限定関係の歴史的発達の諸問題を扱った著書「歴史的文法研究」は、壮大な構想の大著の第一部を成すはずであったが、その著書中で論者は、限定関係以外に、「古代アイスランド語に独特の現象形態でその法則性を現す、原始共同体社会の分解と階級社会の発生」<sup>31</sup>の境界期における、主体・客体的関係、述語的關係、状況的關係、叙法的 (modal) 關係の歴史的発達の法則性も考察する予定であった。惜しむらくは、この著作が完成を見なかったことである。言語学的な、より正確には言語・文体論的な、分析の珠玉の精緻さと獨創性が、これほどまでに高揚した理論的思索や、文法的諸事象の歴史的発展法則への深い洞察や、思考範疇の発展過程の、言語における反映の諸問題を解決する上での獨創性と一体化した研究は、言語学史上稀にしか見出し得ない。

実現された第I部の研究で考察されたのは、1. 部分的限定語 (партитивное определение [partitive attributive])、2. 形容詞の起源、3. 述語的限定語 (предикативный атрибут [predicative adjunct]) である。古代印欧諸語の統語法の比較・歴史的研究にとって、この著書は特段に大きな意義を有している。残念ながら、1950年の言語学論争に起った、我が言語学の史的・類型学的諸問題からの一次的後退と、それに続いて押し寄せてきた、言語組織体系 (言語システム) の形式主義化の熱波によって、XX世紀中葉の言語学的思想の優れた業績に伍するカツネリソンの獨創的労作が当然受けるべき評価や評定が阻害されてしまったのである。

能格性 (ergativity) の問題に話を戻すと、「歴史的文法研究」の著書ではこの概念

<sup>29</sup> Учен.зап. ЛГУ, Сер. Филологич. Науки. Вып. 5. Л., 1941.

<sup>30</sup> Кацнельсон С.Д. Историко-грамматические исследования. I. Из истории атрибутивных отношений. М.; Л., 1949 ([訳者] Кацнельсон С.Д. Историко-грамматические исследования. «Петербургское лингвистическое общество», Санкт-Петербург, 2010) には、前半部に К генезису номинативного предложения 「主格文の起源によせて」を、後半部 (p. 122 ~) に I. Из истории атрибутивных отношений 「限定関係の歴史から」が収められる。

<sup>31</sup> *Ibid.*, p.5. (2010年再版書 p.123)

(能格性—訳者) が事実上欠落している点について指摘しておかなければならない。カツネリソンは、自分が研究対象とする、古代印欧語の一における限定関係の表現システム(表現組織体系)の「段階」の確定に際して、直接的に思考の発達段階に話題を転じて行った。マールに次いで彼は、最も早期の段階として「原始式」思考

(«первобытно-образное» мышление) 段階を区分し、その原始的思考は原始共同体制から階級制への過渡期に最も単純な類概念(простейшие родовые понятия)の思考に取って替るが、それは後の階級社会において「より後続期の概念的思考」に発展して行くことになる、というのである。「古代語」の統語構造に反映された過渡期を、カツネリソンは条件的に「感性的な言語と思考の時期」(эпоха чувственно-сущностной речи и мысли)と呼んだ<sup>32</sup>。この段階の限定的関係を研究して、彼はその限定関係に「原始式言語」と「原始式思考」の時代から継承した、より早期の発展段階の残滓を見出したのである。

この構想における「原始式言語」«первобытно-образная речь»という概念は、実際には非常に拡大解釈した「能格構造」«эргативный строй»概念に相当するもので、論者はこの拡大解釈概念を、自分の最初の著述では、能格構文を有する大多数の言語における残滓的事象としての「能格構文」«эргативная конструкция»の概念と区別していたのである。カツネリソンは、著書「主格文の起源によせて」の出版後10年を経て新たに能格性問題に取り組んでからは、カフカースのヤペテ諸語やバスク語等に現れている能格構文を、その先駆けである原始諸言語の能格文と原理的に区別すべきことを再三強調したのであった。能格構文は、あたかもより古代的なものの「暗示」を含んでいるにすぎず、その古代的なものと同じ訳ではないのである<sup>33</sup>。

**アラント語研究 古体的能格性と残滓的能格性** 彼は新たにこの問題に取り組んだ段階では、探っても概してあまり成果が得られない印欧諸語の構造中にはもはや、主体・客体関係の能格的表現図式の痕跡を見つけようとはせず、能格的文構造がもっと現実的であると見なすことができるような言語資料に取り組んだのである。彼は次のように書いた：「現在では、実際的に古体的(アーカイック)な能格的文構造と残滓的能格構文間の違いをもっと直接的に確定できる可能性がある。この可能性が出てきたのは、古体的(アーカイックな)能格文が生きた規範であるオーストラリアのアラント族の言語の学術的精査のおかげである」<sup>34</sup>。

<sup>32</sup> *Ibid.*, p.72. (2010年再販書 p.172)

<sup>33</sup> *Кацнельсон С.Д.* Эргативная конструкция и эргативное предложение. – Изв. ОЛЯ АН СССР, 1947, № 1, p.44.

<sup>34</sup> *Ibid.*

アラント語の諸資料の研究の結果、古体的（アーカイックな）能格構造の概念は、カツネリソンにとって事実上原始式言語の概念と一体化した。この言語で区分される三品詞（名詞、述詞、代名詞）の内、彼の関心を特に引き付けたのは名詞（имена [nouns]）であるが、彼はその名詞の意味特徴を専門的に研究した<sup>35</sup>。彼はこれらの特徴を、a) 物的意義と質的意義の語彙的未分化性、b) 物的多義性、c) 質的多義性と定義して、これらの特徴をその後「歴史的な文法研究」の著作で、形容詞の起源問題の研究に関連して考察した。さらに20年後にカツネリソンは再び能格的文構造に関する講演を行ったが、その報告全体がアラント語の文の文法構造を扱ったものであった。彼はこの言語における能格構造の独自特徴を述語の構造に結び付けたのである：「他動的述語と非他動的述語—アラント語ではこれは自立語ではなく、意味的に多義的な単一語の形である」<sup>36</sup>。加えて、アラント語では二つの客体格—能動格（active case）と非能動格（inactive c.）—が区別されている。

全く明らかなように、主体・客体関係のこの表現タイプは、普通一般に考えられている「能格構文」（他動詞と自動詞の安定した対立と一つの直接補語をもつ）とは本質的に異なったものである。これはむしろ、最新のソヴィエトの文法的類型論分野の諸研究で主格的文構造にも能格的文構造（二つの発達方向）にも歴史的に先行する構造と見なされている「活格構造」«активный строй»（active structure）である<sup>37</sup>。

したがって、カツネリソンは、自分の諸研究の当然の論理として、最初に表明したテーゼすなわち印欧諸語における主格構造の出現には能格構造—文の普遍的な発達段階としての—が先行していたはずだとする見解からは、はるか遠くへ逸れてしまったのである。

**グフマン** グフマン（М.М.Гухман）が1930年代の中頃に書いた最初の史的類型学研究にも同じく、印欧諸語の主格構造の発達に先行する段階としての能格構文についての断定的主張が含まれていた<sup>38</sup>。グフマンは次のように書いた：能格構文は、「我々の観点からして、印欧語段階に先行した言語の構造はそれに特徴的な動詞と名詞の組織体系（システム）をもつ構造とする極めて完全な判断を下せる可能性を示してい

<sup>35</sup> Кацнельсон С.Д. Язык поэзии и первобытно-образная речь. – Изв. ОЛЯ АН СССР, 1947, № 4.

<sup>36</sup> Кацнельсон С.Д. К происхождению эргативной конструкции. – В кн.: Эргативная конструкция предложения в языках различных типов. Л., 1967, p.40. (同書はЭКПЯРТ [EKPJART]の略称で呼ばれることが多い—訳者)

<sup>37</sup> See: Климов Г.А. Типология языков активного строя. “Наука”, М., 1977, p.172

(2009, “ЛИБРОКОМ”[URSS], М.で再版されている—訳者) —クリモフ著（拙訳）「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」, 三省堂, 1999, p.142.

<sup>38</sup> Гухман М.М. Происхождение строя готского глагола. М.; Л., 1940.

る」<sup>39</sup>。

すでにグフマンにとってのこの初期の研究にも意味的アプローチが特徴的であつて、それはゴート語福音書訳の動詞構文の分析の際にはっきり現れているが、その動詞構文の文法的意義を確定するためにギリシャ語原典の動詞構文との比較を使ったのである。ヴォイス（態）の文法範疇発生を、「能格構文から主格構文への移行時における能格構文の激発期」に結び付けた結論全般は先入観的な性格をもち、歴史的に論証されておらず、実際は分析の実行から得たものではなかったけれども<sup>40</sup>、ゴート語における動詞形の意義や用法の分析自体は、精緻さと深さの点で際立っており、正にその故にこそヴォイス（態）問題の分野でのグフマンの後続研究の方向を先取りするものであった。

段階的類型論の問題提起のための立脚点としてゴート語を選択することは、偶然であった訳ではない。グフマンによるゴート語の専門研究は、その初動段階ではこの言語に特別な関心を見せていたマールに感化されたもので、それはヤペテ語段階から印欧語段階への「ゲルマン諸語の過渡的性格」というマールの周知の主張に関係していた。現代の読者は、このマール構想を考量して初めて、「ゴート語の印欧語化期」に関する、また、「ゴート語動詞の起源の研究によって、ゲルマン諸語の一つと印欧語システムのいわゆる古典諸語との段階的相関性を明確にすることができる」という、グフマンのことばが理解できよう<sup>41</sup>。

印欧諸語の「能格的過去」説の論証は、著書「ゴート語動詞構造の起源」の著者が、ギリシャ語原典に用いられた受動態（passive voice）の形の、ゴート語への変換手法の分析を基にしたものであった。その際主たる注意が払われたのは、ギリシャ語の非人称受動構文を、状態動詞であり自動詞性を明示する IV 類弱変化活用のゴート語動詞（いわゆる *-nan* 動詞）の助けを借りて変換するケースに対してであった。以下の論考はこの事実に基づいたものであるが、これは実質的に、ゴート語の先行発達段階に能格的文構造が存在したとする主張を裏付けるべく論者が定式化した唯一の論証であった。「*-nan* 動詞と受動表現のための自動詞一般の研究は、自動詞の現在分詞の意味における特徴と全く同じように、ゴート語では、他動詞特に能動動詞（active verb）と自動詞つまり非能動動詞（inactive v.）間の区別がまだ意識されていたことを、指示している；この区別がゴート語に自動詞の主体を受動的判断の論理的客体とする意識を可能にしたのである。ただし、他動詞と自動詞の主体の解釈における区別は、ヴォイス

<sup>39</sup> *Ibid.*, p.132.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p.150.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p.153.

(態)との関係によるものではない：周知のように、能格構文が存在する諸言語では、この区別が特別の役割を演じている…。ゴート語ではこの区別は、主格構文が存在するにもかかわらず、すなわち印欧語動詞の場合の普遍的な主格である主格が、ヴォイス(態)範疇とは無関係に、能格構文にとって特徴的な格の区別を駆逐してしまっているにもかかわらず、この区別はヴォイス(態)範疇を表現する際に残滓的に維持されている。したがって、ヴォイス(態)を表すためには、ゴート語は、能動(active)と受動(passive)の区別に代って、他動詞と自動詞の区別が存在した頃のヴォイス(態)以前の状態から残滓している言語手段を使っているのである。ゴート語において、ヴォイス(態)の起源と能格構文の存在を特徴とする言語状態との関連性は、全く明らかである」<sup>42</sup>。

したがって、「ゴート語動詞構造の起源」の著書に展開された見解では、ゴート語における、また同じくそれ以外の古代印欧諸語における能動(active)と受動(passive)のヴォイス(態)の対立は(古代ギリシャ語では中動[medium]を基礎とした受動の発達が並行して進んでいった)、他動詞と自動詞の対立から直接的に発達したはずであり、それが過去に能格構文が存在した証しと見なされたのである：「正に能格構文の存在が規定する言語構造に我々を導いたのは、ゴート語の動詞範疇の分析である。弱変化 *-nan* 自動詞と独特の分詞用法を介したヴォイス(態)の表現は基本的には他動詞と自動詞への独自の動詞区分に由来し、その動詞区分は両動詞範疇の主体の解釈の違いに反映されるからである」<sup>43</sup>。恐らくこの観点の批判に深入りする必要はあるまい。グフマン自身が、すでに1940年代にはこの観点を捨て、広範なゲルマン諸語資料を基にしてヴォイス(態)範疇の発達問題の専門的な研究の規模を広げて行ったからである。初期の研究で彼女が導いた諸結論は、多数の面で弱点を含んでいた。印欧諸語における受動態の形成史が、何らかの別の前主格段階の残滓を探求するのではなく主格的文構造の枠内でよく追跡されている点については言うまでもなく、ある言語のある形態的動詞グループの語用分析によって、文法化された他動詞と自動詞の対立が過去に存在したという主張(能格文の存在の証明として)を論証せんとする試み自体が、明らかに不適切だと思われるのである。ゴート語の主格構造は、印欧語族のその他任意の自然言語(古代語も現代語も)のそれと同様に、異なるタイプの動詞述語をもつ構文を形成するための文法的かつ語彙的可能性の十分な選択幅を有していた。*-na-*接尾辞をもつ動詞グループの使用は、これらの可能性の枠を外れるものではなかつ

<sup>42</sup> *Ibid.*, p.113-114.

<sup>43</sup> *Ibid.*, p.132.

たし、何らかの残滓的諸事象について証明するものではなかったのである。

1947年の報告発表でグフマンが、印欧諸語の段階的発達について述べるときには<sup>44</sup>、「能格構文」のテーマについて触れることはなかった。40年代末に完結した「ゲルマン諸語の受動態の生成と文構造の発展」という大規模研究では<sup>45</sup>、ゴート語 *-nan* 動詞に適用した能格性構想は、もはや語られることはなかったのである<sup>46</sup>。

印欧諸語の「能格的過去」問題へのグフマンの取り組みの一定の再現となったのは、1964年の「各種タイプ諸言語における能格的文構造」(Эксперт ЭКПЯРТ)学会で発表された報告である。与格/対格—ロシア語 *Мне нравится* (*Мне nravitsja*) (私には気に入っている、私は好きだ)、ドイツ語 (archaic) *Mich wundert des schwarzen Ritters* (私には黒騎士たちが訝しい[訝しく思われる])、等のタイプの人称の格、より正確には特徴の担い手の格—をもつ印欧語構文について述べながら、彼女はそれらの構文を、同一文法組織体系(文法システム)の範囲内で能格構文と共存するグルジア語における類似の構文と比較して、これに関して次のような推定を述べたのであった:「印欧語与格構文の古い図式が過去に存在したことがこれに対立する能格図式も存在する可能性の間接的証明である」<sup>47</sup>。

グフマンは最近の著作で<sup>48</sup>、印欧語主格構造の発達に対しては、クリモフが「活格構造」と呼んだ言語構造タイプが先行した、とするクリモフ仮説に与している。ただし、これについては以下に述べる。

**30-40年代「能格的過去説」研究—「意味的時代」** 印欧諸語の「能格的過去」についての専門研究が始まった1930-40年代の時期を振り返ってみてもう一度強調しておきたいと思うことは、これは文法範疇の史的類型学の諸問題の研究における「意味的」時代であった、という点である。主格的文構造の生成と発展の諸問題を扱った当時の諸研究では、これら諸問題がどのような解決法を採ろうとも—能格説の気風においてであろうが、あるいは逆に当時流行った理論に反対であろうが—、できる限り古代諸言語テキストに取り組んで、研究対象とした文法的諸事象の機能面の分析に論証の重点を置いたことが特徴的である。必然的に諸事象の形態面は勘案されたけれど

<sup>44</sup> Гухман М.М. О стадияльности в развитии строя индоевропейских языков. – Изв. ОЛЯ СССР, 1947, № 3.

<sup>45</sup> See: Автореф. докт. дис. М.; Л., 1950.

<sup>46</sup> See: Гухман М.М. 上記論文「ゲルマン諸語におけるヴォイス(態)対立の発達」(Развитие залоговых противопоставлений в германских языках. М., 1964, p.69-102.)の決定版に所収のゴート語4類動詞に関する専門章を参照。

<sup>47</sup> Гухман М.М. «Конструкции с дательным / винительным лица и проблема эргативного прошлого индоевропейских языков» - в кн.: Эргативная конструкция предложения в языках различных типов.(ЭКПЯРТ) Л., 1967, p.73.

<sup>48</sup> Гухман М.М. Историческая типология и проблема диахронических констант. М., 1981.

も、それだけが古代の状態を再構するためのベースになった訳ではない。研究者達は、名詞語幹や動詞語幹の諸タイプの相違と類似とか、パラダイム構成要素中の格指標の形式的相関関係といった形態的諸事実を、意味的に解釈し、それ等諸事実の機能・文法的な原理を定義し、そこで初めてあれやこれやの仮説を立てようと努めたのである。異なる構造の諸言語との類型的比較もまた、論証の方法において一定の役割を演じたのであった。

二次的で偶然的かもしれない音声面の外見的一致を含む個々の格形式指標の比較と同定化によってのみ当該問題を純形態論的視点で解決しようとしたそれ以前や同時代や後続の試行と比べてみると、この全ての点で印欧諸語の「能格的過去」テーゼを論証しようとした30-40年代の「能格論者」(«эргативисты» [ergativists])の試みの方が確かに優れていた。

**デスニツカヤ** 当時、文構造の発達における必然的な段階として能格性を普遍化すること(универсализация [universalization])に対する賛否をめぐる諸論争は意味的・文法的レベルで行なわれた。この諸論争をめぐる学的情況の中で書いたのが、1946年に脱稿した拙論「印欧諸語における直接補語範疇の発達」である。私は当時支配的であった、印欧諸語の「能格的過去」説の熱狂に捉われたことはなく、古代印欧諸語における主体・客体関係の表現システム(組織体系)の起源問題に関する自説の完成に努めていた。それを促した要因としては、恐らく、私の古代諸言語の学習は勿論だが、独特の変異型の能格的文構造を見せるグルジア語との出会い(3年間ドンドゥア[К.Д.Дондуа]の指導を受けて古代グルジア語を勉強したこと)や、また同じくボカリョフ(A.A.Бокарёв)のような当該問題の権威たる専門家から授かった、アヴァール語やその他のダゲスタン諸語における能格構造の特徴についての具体的で多面的な情報知識である<sup>49</sup>。

拙論の内容については以下でさらに詳しく話題に載せるから、ここではこの研究の最終的結論を引くだけにとどめておこう。「完成した研究は、印欧諸語における直接補語範疇の発達史を明らかにすることを吾が課題としていた。形態(morphology)と統語(syntax)の古体的(アーカイック)な諸特徴の分析(とりわけ古代印欧諸語における格支配の分析)に基づいて、私は、対格がどのように形成されて来たのか、起源的には状況・限定語的な機能をもつ無徴的名詞語基(неофомленная именная основа [unmarked nominal stem])に遡及する対格が、長期にわたる過程を経てようやく、他動

<sup>49</sup> 1941年の初めカツネリソンは、ボカリョフと私への謹呈自著論文の一つの抜き刷りに、人なつこく議論を吹っ掛ける調子で(добродушно-полемиически)「能格論者から反能格論者へ」と書いたものである。

詞の下で直接補語の専用格となったことを示そうとしたのである。

これによって我々の前には、動詞の他動性それ自体は比較の後発的な範疇として現れるのである。これらすべてのモーメント（契機）の解明が、印欧諸語にとって特徴的な主格構造の生成過程を確定する上で非常に重要な意義をもつことになる。他動性範疇が後発的発達であることや、直接補語格が述語に組み込まれた特徴の限定辞としての働きを担う名詞語基に由来することは、管見によれば、印欧諸語の『能格的過去』説の誤りを証するものである。印欧語型の主格構造と例えばカフカースのヤペテ諸語に現れるような状態での能格言語は、主体・客体関係の異なる形成法である<sup>50</sup>。

上に引用したスピーチには、30-40年代期の科学アカデミーの言語と思考研究所の学術活動に満ち溢れていた創造的諸論争の状況下の切迫した響きがあった。

**ブブリフと「絶対構造」** ブブリフ (Д.В.Бубрих) が、モルドヴァ語の文法的構造化の古体的 (アーカイック) な一彼の考えによると一諸特徴に基づいてフィン・ウゴル諸語の主格構造の発達過程に関して到達した結論にも、この同じ状況下での切迫した響きがあった。ブブリフが主格構造よりもまた能格構造よりも段階的にもっと遠い過去のものと考えた構造は絶対構造 (ブブリフの用語 абсолютный строй [absolute structure]) であり、この絶対構造の下では「話者にとって重要なのは、行為者と行為の直接客体の範疇ではなく、活動の場の中心たる対象のカテゴリーであり、しかも、活動の場の中心たる対象になるのは先ずは行為の直接客体であり、行為の直接客体が存在しない非他動的な性格の行為の場合だけはそれは行為者である」<sup>51</sup>。ブブリフの考えによれば、絶対構造から発達したのが、フィン・ウゴル諸語の主格構造であった。しかし、このような発達過程は、「フィン・ウゴルだけの専有」ではなかった。こうした発達過程は、「至極当たり前で自然なこと」であって、それ以外の多数諸言語においても生じ得たことである。それどころか、さらに続けてブブリフが論じたように、発展過程は別様にもなり得たのである：すなわち、「...いくつかの諸言語では、絶対構造を使う伝統が動詞の発達全般を自らに従わせた。ところが、これら諸言語における絶対構造は、それに止まらずに能格構造へ向けて発達を始めた。能格構造は、統語面からは主格構造が保障するもの全てを完全に保障し、一方、形態面からは全く何も妨げない構造であるから、これは言わば別の状況になれば主格構造が強化される時点

<sup>50</sup> Десницкая А.В. Развитие категорий прямого дополнения в индоевропейских языках. – Докт. Диссертация, Л., Ин-т языкознания, 1946, p.673.

<sup>51</sup> Бубрих Д.В. К вопросу о стадийности в строе глагольного предложения. – Изв. ОЛЯ СССР, 1946, № 3, p.206.

で発生してくる事象と見なすべきである」<sup>52</sup>。

**40年代学会の特徴** 40年代には、文発達の「能格段階」の普遍性を斥けて、主格構造や能格構造が、その何れの文構造にも先行する、より早期の文構造から並行的に発達して来たとする構想を提起することは、自己の立場を次第に失いつつあった始原的能格性説に対して、益々決定的に対立し始めていた。そのせいで、言語学における段階性問題を扱った一連の学術会議（1945年12月－1947年2月）を締めくくったメッシャニーノフの結語報告に含まれた定式化は慎重だった。メッシャニーノフは、討議の過程で一定の意見の不一致の存在が明らかになったことを指摘しながら、次のように論争の結果をまとめている：「(報告者間に自分たちが研究する言語資料の具体的な差異に起因する食い違いが部分的に出てくる)。研究の現段階では、恐らくこうした矛盾は避け難いであろうし、段階の基本特徴に応じた言語諸段階の完結した体系的記述を行うことはできないであろう。先ず問題なのは、個々の言語や言語群の具体的な歴史的研究に現れる一連の段階的移行についてである。特に、印欧語系統の諸言語をさらに深く比較・文法的に研究していくと、現代言語学は前主格構造の問題に至るのである。しかし、言語研究が照準を合わすべきは、先ずは当該言語の歴史の研究であり、次いで同語群（同系統）諸言語の比較、そして最後に異なる系統の諸言語の段階・類型学的類似性における比較である。我々は、こうして様々な言語の資料に基づいて行われた、方法論的に正確かつ厳密に検討された比較・文法的な研究によって、最終的に段階概念を明確化し、段階的移行の構想図を画くことができるのである」<sup>53</sup>。

メッシャニーノフをこれより一段と柔軟な史的類型学研究の課題の定式化に導いたのは、40年代に比較言語学の分野で展開されたソヴィエトの言語学者たちの研究（印欧諸語、フィン・ウゴル諸語やそれ以外の諸言語の資料に基づいた）は勿論、特に彼が関心を寄せていた、シベリアの少数民族の言語（古アジア諸語、ツングース・満州諸語）の文法構造の研究の深化であって、それら少数民族諸語に取り組んだのは、40年代に公刊された、専ら文構造の独自特徴の解明に的を絞った多数のモノグラフである<sup>54</sup>。

<sup>52</sup> *Ibid.*, p.211.

<sup>53</sup> Обсуждение проблемы стадийности в языкознании (Хроника). – Изв. ОЛЯ СССР, 1947, № 3, p.259. [訳者－クリモフの学史によれば、ここに記される「学術会議」の日程は1946/12－1947/2の誤記と思われる；また括弧（ ）内は次の学史から補った－クリモフ（拙訳）「ソ連邦における類型学研究（20-40年代）」名大科研報告, 2002, p.303を参照]。

<sup>54</sup> See: 特に：Суник О.П. Очерки по синтаксису тунгусо-маньчжурских языков. Поссесивный строй предложения. Л., 1947.; Скорик П.Я. Очерки по синтаксису чукотского языка. Инкорпорация. Л., 1948.

\*

\*

\*

**クリモフ著「ソ連邦における類型学研究 (20-40 年代)」** 1930-40 年代の諸研究は歴史の事実となつて、すでにこの歴史の研究が始まっている。特に、文法的類型学問題の分野におけるソヴィエトの言語学者たちの諸研究の発展方向と意義は、近年のクリモフ (Г.А.Климов) 著「20-40 年代のソ連邦における類型学研究」(モスクワ 1981 年)においてかなり完全なかつ客観的な解明がなされている。[訳者一拙訳がある：2002 年 科研成果報告書「ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究」(代表 柳沢民雄一名古屋大学) 資料として、同報告書に所収]

クリモフは、一定の時間的距離から自己の研究対象を観察する学史家としてこのテーマにアプローチしている。彼は当時公開された言語学文献に綿密な分析を加え、自分が携わった研究の問題領域に応じて記述を四つの章に分けた：すなわち、I. ソ連邦における類型学研究の歴史的原点、II. 類型学の理論と方法の諸問題、III. 類型分類の問題、IV. 史的類型学的仮説の検討、である。こうした同著の構成は、当時のソヴィエトの言語学者らの諸研究が提起し、検討し、あるいは言及した広範な問題領域を客観的に、遺漏なく、系統的に概観することを保障するものであった。これにつけ加えるべきは、クリモフ自身が能格的文構造や活格的文構造に関する自身の諸業績によって、わが国の史的類型学研究の伝統を再建すべく多くのことを成し遂げたことである。この分野が生きぬいて来た科学的探究の歴史には、その歴史に直接的に関つた当事者たちも立ち向かい始めている。容易に理解できることであるが、この歴史に対する当事者たちの眼差しは、学者達の生きた思想の躍動を単に出版物に描出する目的に限って研究するにすぎない歴史家の眼差しほど叙事的に平静であったり、また広く網羅的ではいられない。当事者の眼差しは、諸事実の説明上ではなくとも、ともかくその諸事実を選び取る上で、ある程度主観的に着色されることは避けられないだろう。裏返して言えば、科学的伝統を創造する当事者たちは、万事が実際どうであったかを知っており、時系列順や、自分の時代にとっての現実的重要性を考えたり、その現実的重要性を構成する諸要素を感情を込めて着色してまで、この伝統がどのように形作られて来たか、を示す生の情景を(勿論、そう望むならば)再現して見せることができるのである。これらの場合に記述する諸事実の選定や選別に伴う主観性のニュアンスは、釈明し弁明されて然るべきである。その科学的過去の一部を成す諸事実について書く論者は当然、その記述を一定の課題に合わせ、その課題に照らして、単にある科学的思潮の歴史を書くのでなく、あらためてその思潮に対する自分の態度を表明するからである。

例えば、ソヴィエト言語学史の諸事実を豊富に含んだ非常に興味深く内容に富んだグフマン (М.М.Гухман) の近刊モノグラフには<sup>55</sup>、これら諸問題に対する論者の現代の立場の観点から、ただし当該分野における先行諸研究の科学的試行全体を広く網羅して、言語類型学の諸問題全体の総合的 (シンテティック) 記述に重点を置いたことがはっきり現れている。こうした総合的なアプローチの場合には、恐らく、30-40年代のソヴィエト言語学にとって特徴的な史的類型学的諸研究の伝統を築く仕事に参画した個々の学者たちの観点を差異化した記述を行なうことは無理であろう。

**私の語りは当事者が語る学史** この同じ伝統の歴史の諸事実に関する私の語りの特徴は、それとは逆に、専ら印欧諸語の主格構造の起源問題に注意を絞りつつ、私自身の諸研究も進んで来た路線での具体的発展方向を構築する上で、すなわち文構造の史的類型学の分野において、特に重要な役割を演じてきた幾人かの論者たちの研究路線を強制的に取り上げる点に現れている。この限定的な記述方針を採るため、言語的段階性論に関するいくつかの重要な研究、また個々のカフカース諸語における能格構文の諸特徴のより個別的な諸研究も、記述には含めていない。関心を引く問題全体の研究史の記述、なにかんづく印欧諸語の「能格的過去」問題に関する諸論争の歴史的文脈 (コンテキスト) の再現は、私の課題に含まれていないが、同論争への私の関りは1946年に私が完成した、これら印欧諸語における直接補語範疇の発展に関する研究 (本訳稿の註50の博士論文とこれに関する本文記述を参考一訳者) に反映されている。私はこの研究を30-40年代のソヴィエト言語学における文法的類型論の諸問題研究史の構成部分の一と考えており、このことは、近年の言語学文献でのこの研究の複数引用が裏付けている。正にその故にこそ、私はこの研究の一部を、しかもこれを修正せぬままで、正に学的諸探究と諸論争の真っ只中に成った研究論文のままの形で公刊することは是とされると考えた。歴史言語学の分野で私の研究が始まった学界で熱声飛び交った頃のこれらの諸探究と諸論争の内容に充てたのが、私が序論として書いた、文法的類型論の分野におけるソヴィエトの諸研究の歴史の中のこの一章である。

私の記述に今なおかつて沸騰した論争の参加者の確固たる立場や、なお鳴り止まない激論の余韻なりが感じられても、読者諸氏の吃驚なからんことを。記述対象とする諸説のあれやこれやの主張に対して私が述べた反論は、すでにはるか以前に歴史の財産となった諸研究に対する時機遅れの批判として、したがって一種のアナクロニズムとして理解してもらってはならない。私の批判は今日の学的立場からではなく、私の

<sup>55</sup> Гухман М.М. Историческая типология и проблема диахронических констант. М., 1981.

以前の反証を繰り返して、正にそのことで過ぎ去りし年月の論争状況を再現しているのだ、と言ってよいかもしれない。このことに関連して強調しておくべきは、30-40年代の類型学構想の歴史記述の私の基本方針とクリモフが基礎とした修史

(historiography) 研究の方針とは本質的に異なることである。クリモフは、本質的には予め諸事実を批判的に選定するに当たって、検討対象とする遺産(レガシー)の中で、「多少ともソヴィエトの国内外の言語学者たちの現代の類型学研究ともその接点が感触される」思想的 content だけに重点を置いて然るべきだと考えたのである<sup>56</sup>。私の概観で課題としたのは、印欧諸語の主格構造の起源問題をめぐるかつての論争の内容的な文脈をできる限り再現することであり、特に、かつて私が論駁対象とした主張や、私自身が反論のために練り上げた「反能格論者」としての自説の主張を浮き彫りにすることであった。

クリモフの歴史的概観で展開された、諸事実の客観的記述に多少の色調を添えることができればと思う。例えば、クリモフが、「ソ連邦における類型学的諸研究の歴史的原点」の章で指摘した、「40年代のわが類型学徒への」ポテブニャ(A.A.Потебня)の言語学的遺産(レガシー)の深い影響に関してである<sup>57</sup>。

この事実を確認するだけでは、それがあつた時期のソヴィエト言語学史にとって実際に重要であつたというイメージは湧いてこない。後に続く言語学徒の世代は恐らく、統語構造の史的類型学の諸問題に取り組んでいた「言語と思考研究所(イヤム)」の若い研究所員たちがポテブニャの文法思想にどれほど強く熱中していたかイメージできまい。マール(H.Я.Март)の諸研究が30年代後半のこれら研究所員の多数の者たちにとって、基本的には引用に適した原文のいくつかの言説の抜粋資料であり、またメツシャニーノフは彼らにとって賛否両論の対戦・論戦ができる先輩同志であり先輩の友であつたのに対して、過去のロシアの傑出した言語学者ポテブニャは「預言者」であり、また、彼の労作「ロシア文法覚書から」は「天啓」の書であつて、同書からは一定程度史的類型学的理論上で依拠し得る多くの深い思想や精緻な統語的観察結果が引き出されたのである。ポテブニャの言語学的諸見解の解釈は、30年代末には、能格性問題と並んで、ネヴァ河畔の花崗岩の通りを散策しながら若い言語類型学徒たちが互いに交わした尽きることなき対話と議論のお気に入りのテーマの一つであつた。勿論、誰もが全て同じ様にこの熱狂に取り憑かれていた訳ではないが(「言語と思考研究

<sup>56</sup> Климов Г.А. Типологическое исследование в СССР, p.5. (cf. 「ソ連邦における類型学研究—20-40年代」—2002年名大科研報告書「ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究」[代表柳沢民雄], p.244に拙訳)

<sup>57</sup> *Ibid.*, p.19. (→同上 p.252-253)

所（イヤム）」の主だった「ポテブニヤ彙員」はカツネリソンとボカリョフであった）、ポテブニヤの文法研究の独創的な研究は、影響を及ぼしただけに止まらず、30-40年代のソヴィエト言語学の史的類型学構想を錬成して行く上で一時期を画した、と言っても誤りではなかろう<sup>58</sup>。したがって、1947年に、類型的発達の諸問題に対するポテブニヤの見解の理論的意義に関する問題をめぐってヴィノグラードフ

（В.В.Виноградов）とカツネリソンの間で展開された激しい論戦がどれほどの事件として受け取られたかが想像されよう<sup>59</sup>。ヴィノグラードフは、ポテブニヤの統語論学説の批判的分析を通して、当時いわゆる「新言語学」の主要命題の一つであった段階性理論に対して論戦の刃を向けたのであった。カツネリソンは、ポテブニヤの文法学説の長所も短所も全面的な批判的分析によって応え、諸言語の文法構造の一般的な発展法則を研究することが必要だという主張を擁護した。この論戦の一部は「言語と思考研究所（イヤム）」内で行なわれたものである。

科学は生きた人間たち、生きた人間集団によってなされる。ソヴィエトの史的類型学諸研究の最も輝かしい学流の構築は、科学アカデミーの「言語と思考研究所」と不可分一体の関係にあるが、30-40年代同研究所を主宰したメツシャニーノフは彼自身もこの問題群に熱中した独創的で傑出した研究者であり、全ての人たちに対して変わることなき思いやり、気遣いを見せ、他者の意見に対しても忍耐強い指導者であった。あらためて当時の諸研究活動を通観して見ると、私は知らず知らずの内に、それが多年に亘ってこの研究所がネヴァ河右岸の科学アカデミーの古風な建物の中で息づいてきた活発な学術的営為の中の一コマとして思い浮かぶ<sup>60</sup>。

<sup>58</sup> カツネリソンは、ポテブニヤ、フィーリン（Ф.П.Филин）、リフチン（А.П.Рифтин）、ハロドーヴィチ（А.А.Холодович）の遺産を研究する上での役割も指摘している。See: *Кацнельсон С.Д. К вопросу о стадийности в учении Потебни. – Изв. ОЛЯ АН СССР, 1948, 3 1, p.83.*

<sup>59</sup> See: *Виноградов В.В. Учение А.А.Потебни о стадийности синтаксического развития в славянских языках. («Славя諸語における統語的発達の段階性に関するポテブニヤ学説）」 – Вестник МГУ, 1947, № 3-4; Кацнельсон С.Д. К вопросу о стадийности в учении Потебни.*

<sup>60</sup> 私は言語と思考研究所の学術活動、特に盛況だった30年代末頃のその活動を思い出すと、郷愁の念に包まれる。その学術活動にとって特徴的であったことは、旧世代の傑出した学者たちが、若くて大胆な、時に必要以上に自信過剰でありながら常に献身的に学問に専念しながら新しい科学の方向を切り拓くことを夢想していた者たちに対して、変わることなく好意的に接していたことである。節度あるメツシャニーノフ議長の下で開かれた「全員参加総会」は、私にはお祭り日のように思われ、そこでは学問上の新しい着想を生み出したり互いに伝え合うという奇跡的な出来事が起っていた。おとぎ話から抜け出たように私の目の前に蘇るのは、並外れてギラギラと黒光りする眼の老アカデミー会員リャプノフ（Б.М.Ляпунов）の姿であるが、彼は順に登壇する発表者の声がよく聞こえるよう絶えず席替えをしていたが、その間彼の細君の方はホールの片隅で静かに長靴下を編みながらまどろんでいた。

勿論、文法的諸事象の史的類型学の諸問題は、総会のテーマとして大きな位置を占めていたが、それだけではない。他の多数の諸問題が提起され、時にはそれが非常に大きな学術的な反響を呼ぶものであった。私が覚えているのは、明るく晴れわたった日のことフィーリン（Ф.П.Филин）とラーリン

\*

\*

\*

## 長い中断後 60 年代の史的類型学研究の復活 (エクピャルト ЭКПЯРТ 学会)

長い中断の後に 60 年代の中頃に史的類型学の分野における諸研究が現れ始めた。1964 年レニングラードで、参加者構成が広範囲に及ぶ「各種類型諸言語における能格構文」のテーマでの会議が催された。幾人か (メッシュャニーノフ<sup>61</sup>、チコバヴァ [А.С.Чикобава]、スニク [О.П.Суник]、ヂャーコノフ [И.М.Дьяконов]、カツネリソン) の報告において特に検討されたのは、能格構文の統語的性質の確定に関する理論的諸問題であった。大多数の発表は、各種諸言語—カフカース諸語、古アジア諸語、現代イラン諸語、現代インド諸語、他—における能格的文構造の具体的諸特徴を扱ったものであった。これらの発表の内若干には、共時面と通時面におけるそれぞれの諸言語の統語的類型的な構造特徴に関する理論的問題提起も含まれていた。公刊された会議資料には<sup>62</sup>、能格的文構造は広範囲に亘って多数の諸言語についての概要の形で提出されたが、これらは統一図式に沿った構成ではないけれども、それにも拘らず類型学的比較にとってかなり密接に関連する諸事実集合を提示したのであった。理論的諸問題に関して行われた討議も全体として、能格構文を独特の構文化タイプとする理解を深化させる役目を果たした。

(Б.А.Ларин) が初めてロシア語方言地図の作成計画を説明すると、ジルムンスキー (В.М.Жирмунский) がこの事案を歓迎して自分の方言研究の豊かな経験を語ったこと、シジェルバ (Л.В.Щерба) と当時レニングラードに滞在していたテニエール (L.Tesnière) が講演したことである。比較言語学—印欧語学、フィン・ウゴル語学...—の諸問題が討議された。そうした討議の一つでヤクビンスキー (Л.П.Якубинский) が初めて印欧語学にとってのヒタイト語諸資料の重要性についてソヴィエトの言語学者らの注意を喚起し、これに関連して、「印欧語の名詞形成の起源」に関するバンヴェニストの著作 (Benveniste É. *Origines de la formation des noms en indo-européen*, I, Paris, 1935) で提起された諸問題の意義を指摘したものであった。我々が全神経を傾けて聴いたのは、30 年代後半にスペインの諸言語についての著書 (「スペインの諸言語史概説」, М.:Л., 1941) を書いたシシマリョフ (В.Ф.Шिशмарев) の講演であったが、同著は彼がファシズムと反動に対するスペイン人民の英雄的な闘いに鼓舞され気迫を込めて書いたものである。スペインにおける事件は万人の心を揺さぶるものであった。

これは、学問と社会と個人を溶結して一体化させる生きた営みであった。この活動の中から、本当にソヴィエト言語学の伝統といって然るべきものが生まれ、またこの活動と切り離すべきでない継承的關係が現れて来た。

<sup>61</sup> メッシュャニーノフが多年に亘って一貫して系統的に研究し続けて来たのは、統語構造の共時類型学の諸問題であった。彼が晩年になって特に検討してきたのは能格的文構造の問題であって、各種諸言語 (カフカース諸語、古アジア諸語、ウラルトゥ語) における能格的文構造の現れを追跡してきた。これらの諸研究の総仕上げとなったのが、彼の死後公刊された労作「各種類型諸言語における能格構文」(レニングラード、1967—И.И.Мещанинов, *Эргативная конструкция в языках различных типов, из-во Наука, Лен. Отделение, Л., 1967*)—であった。(訳者—同著はメッシュャニーノフ個人が著した pp.248 に及ぶ著書で、次の 62 の註に挙げられる著書名と類似しているが、別の著書である—一註 62 の著書にはある предложения (文) が無いことに注意)。

<sup>62</sup> Эргативная конструкция предложения в языках различных типов. Л., 1967. («各種類型諸言語における能格構文」)(訳者—これは 1964 年 12 月 7-11 にレニングラード「言語学研究所」で開催された拡大教授会での講演・報告集。略称 ЭКПЯРТ [エクピャルト]。)

### Vjač.イヴァノフとサフチェンコ ヴャチェスラフ・イヴァノフ

(Вяч.Вс.Иванов) とサフチェンコ (А.Н.Савченко) の報告であらためて反響を呼んだのは、印欧諸語の「能格的過去」のテーマであった。この二度目のテーマ再燃にとって特徴的だったのは、30-40年代の意味的研究の方向性とは異なって、特に形態分野から論証を引き出す点であった。もっと正確に言うならば、決定的意義が付与されたのは、一つの論証—主格と属格の-s指標の同一性の証明—であり、このことから-s主格がかつての能動格 active (能格 ergative) であったとする結論が引き出された。すでに上で触れたように、こうした仮説は、早や1902年に初めてファン・ウェイク (von Nicolaus van Wijk) が提起したが、同仮説は1935年にあらためてクリウォーヴィチが提唱した。クリウォーヴィチにとってこれの再構のきっかけとなったのは、いくつかの印欧語の語根基から主格形における母音延長の事実を説明したいとする欲求であった。この再構によれば、語根にアクセントをもつ古い主格(「受動格」)が、かつてある時能動格(属格と共通の格)圏内に侵入し、それに取って替った後、そこからアクセントのある語尾 \*és を借用したが、同語尾は無アクセントの位置に転じて母音を失い、そのことから古代インド語主格 pāt, ギリシャ語 πους – 属格 padáh, ποδος「足」タイプの語根母音の代償延長 (compensatory lengthening) が起きた。このことから導かれる結論：過去における能格構文の存在。

クリウォーヴィチ自身は、この結論を証明を必要とする仮説としてかなり冷静に評価しており、「能動格」と「受動格」に関する問題は一般に、動詞の他動性範疇およびヴォイス(態)範疇の問題と併せて解決されるべきだと考えていた<sup>63</sup>。その後は、彼は印欧語文の能格的過去説に戻ることはなかった。さらに、彼は1947年統語的段階性説に反論する挑戦的論文では、能格的過去説には触れようとさえせず、「…能格性と主格性は思考の如何なる差異も反映しないだけでなく段階的に全く不確かな形である」という見解で結んでいる<sup>64</sup>。メッシュャニーノフやカツネリソンの構想に対して公然と論争を挑むこの見解の背後に、彼が以前提起した、主格語尾と属格語尾の同一性に基づく印欧語の能格性の再構を暗に放棄する意図が潜んでいなかったのかどうかは断じ難い。

**イヴァノフ** 60年代中頃に発表されたヴァチェスラフ・イヴァノフの諸研究において、主格と属格の語尾の一致は-s主格形が能格構文の能動格形に起源をもつことを指示するというテーゼは、疑問の余地がないものとして受け容れられた<sup>65</sup>。補足証明

<sup>63</sup> *Kurylowicz J. Études indoeuropéennes.*, Kraków, 1935, s.165.

<sup>64</sup> *Курлович Ю. Эргативность и номинативность в языке.* – Изв.ОЛЯ АН СССР, 1947, № 5, p.393.

<sup>65</sup> *Иванов Вяч.Вс. 1) Эргативная конструкция в общендоевропейском.* – В кн.: Эргативная конструкция

として論者は、ヒッタイト語においては古いテーマ型語幹（ヒッタイト語の *-a* 語幹）の属格形が主格形と一致することも示した<sup>66</sup>。

**サフチェンコ** ファン・ウェイクークリウォーヴィチ仮説を基にして、サフチェンコ (A.H.Савченко) は、印欧語の古層の状態に能格的文構造の存在を証する自らの体系 (システム) を構想した<sup>67</sup>。彼はこの仮説の発展過程で、\**es* 格は「行為動詞の下での主体、間接客体と場所—能格が特徴とする、諸意義の兼務—」を表したから、これはかつて能格であった、と主張している。彼は、能動性 (активность [activeness]) の意義を基本的な意義と見て、間接客体の表現機能を派生的機能と見なしたのである。この場合、彼は次のように説明する：「間接客体が能格によって表されたのは、恐らく、それが能格構文の形成期には活動的、能動的なものと意識されたからであろう」<sup>68</sup>。私には、サフチェンコはどうやらこのようなやり方で、能格の、間接客体の組織体系 (システム) への帰属性を証明するという難問 (多くの研究者が避けて通る問題) を解決するに際して必須であるべき、統語的アプローチという厳律を犯しているように思われる。

サフチェンコは、名詞の能動類と受動類への区別に、印欧祖語の動詞組織 (動詞システム) の原点は行為動詞と状態動詞の対立であるはずだという、中動態範疇の起源についての自身の研究の結論を結び付けるのである<sup>69</sup>。この点に、彼は、印欧祖語の能格構文と、能格あるいは絶対格による行為主体の表現が動詞の他動性か非他動性かに依ることを特徴とする現代諸語に存在する能格構文の種類との、ある種の差異を見出したのである。正にこの理由で、彼は、主体が客体に対立するのではなく、能動物が受動物に対立するあるいは行為主体が状態主体に対立するという、すでに以前に述べた早期の文構造式に関する主張に至るのである。

### 史的類型学研究—クリモフによる能格構造と活格構造の全容解明—の新段階

印欧諸語の主格構造前史に関する諸問題の解決に影響を与えた、文構造の史的類型

предложения в языках различных типов. Тезисы докладов. Л., 1964, p.18; 2) Общинеоевропейская, праславянская и анатолическая языковые системы. М., 1965, p.51-54.

<sup>66</sup> *Ibid.*—イヴァノフは、この点に関連して、主格と属格の対立の統語的中和化の事実に注意を向けさせ、その中和化のおかげで、中性の語幹—抽象名詞か動詞派生名詞 (これは *-s* 主格形をもつことができない) —から作る *-s* 属格形は、ちょうど行為者名詞である有生名詞の主格機能に相当する機能で登場する (属格 *uaš-tulaš* «(человек) греха = грешник» 「(人) 罪の=罪人」 < *uaštul* «грех» 「罪」)。論者はこの現象を能格の特徴を反映する文法的古体 (archaism) とみなし得ると考えたのである。

<sup>67</sup> Савченко А.Н. 1) Эргативная конструкция предложения в праиндоевропейском языке. – В кн.: Эргативная конструкция предложения в языках различных типов. 1967.; 2) Этапы развития грамматического строя праиндоевропейского языка. – *Lingua Posnaniensis*. XII/XIII, 1968.; 3) Сравнительная грамматика индоевропейских языков. М., 1974.

<sup>68</sup> Савченко А.Н. Эргативная конструкция предложения в праиндоевропейском языке. – В кн.: Эргативная конструкция предложения в языках различных типов. 1967., p.89.

<sup>69</sup> Савченко А.Н. Происхождение среднего залога в индоевропейском языке. Ростов-на-Дону, 1960.

学の研究における新しい段階を画したのは、クリモフの能格性理論の諸研究と、彼が「活格構造」«активный строй»(active structure, active system)と呼んだ、主体・述語関係および主体・客体関係の独自表現タイプに関する理論の諸研究であった<sup>70</sup>。

能格性の問題群を体系的に記述し、かつ能格構文をもつ諸言語の諸事実を広く提示した1973年の著書ですでに、クリモフは単文の枠内で、統語関係を表す特別な組織体系(システム)としての活格構造(активный строй)の概念を提起した。クリモフは、自分の先達たちが当該問題領域の研究面で主格類型や能格類型の諸言語のより初期状態の残滓として解釈してきた現象を分析した結果、活格構造にとって典型的な諸特徴の集合を統合する意味的原理を次のように規定した：「言語諸現象のこの大集合の具体的な特性は、活格構造の意味的決定因子(семантическая детерминанта [semantic determinant])が、能格構造諸言語や、また明らかに主格構造諸言語にあるような主体原理と客体原理の対立ではなく、活性原理と不活性原理の対立である、と考えるべき根拠を示すのである…。このことに照らして、ここに特徴づけを行なう諸言語の構造は、ここで言外に含意される(имплицитное выражение [implicit expression])主体・客体関係の伝達ではなくて、専ら活性行為項と不活性行為項の間に存する関係に定位したものである」<sup>71</sup>。

論者は、活格構造のこの基本的な意味的決定因子(семантическая детерминанта [semantic determinant])に相応する活格構造の包含事象(implication)を列挙して、言語の全レベルで(語彙レベル、統語レベル、形態レベルの順に)検討を加えている。同時に、活格的文構造が能格構造あるいは直接に主格構造へ再編されて行く過程の推移が一樣でないことが明らかにされている。能格構造は、活格構造から主格構造への歴史的に中間的な、ただし必ずしも必須ではない運動段階位相とする特徴づけがなされている。論者は、印欧諸語にとっては、また恐らくはセム・ハム諸語やチュルク諸語にとっても同じく、活格構造から主格構造への歴史的に完了した直接的な発展過程を仮定している<sup>72</sup>。強調されているのは、カルトヴェリ諸語に特に鮮明に現れる「能格構造の内的矛盾」である。

クリモフは、活格構造の、能格構造へあるいは直接的に主格構造への変換を最終的に決定づける因子は、「思考分野に」求めるべきである、と考えている<sup>73</sup>。正にこの

<sup>70</sup> Климов Г.А. 1) Очерк общей теории эргативности. М., 1973; 2) Типология языков активного строя. М., 1977. [訳者-1), 2)とも、2009年モスクワ URSS グループのリブロコム社(ЛИБРОКОМ)が再販している]

<sup>71</sup> Климов Г.А. Очерк общей теории эргативности. М., 1973, p.215.

<sup>72</sup> Ibid., p.248.

<sup>73</sup> Ibid., p.253.

ことから、彼の構想が、30-40年代にソヴィエトの言語学者たちが発展させた、諸言語の文法構造の進化 (эволюция [evolution]) という考えと直接的な思想的な繋がりをもつことが確認されるのである。この繋がりには論者自身も認めていることである。

一方、彼は、「能格構造と主格構造の意味的決定因子」の相似性ないしは少なくとも近似性を、また同じくそれら両構造のかなり多数の構造的類似性を指摘して、主格構造諸言語と比べた能格構造諸言語の特段の「古体性」という、過去に主張された見解は斥けている。しかしながら、彼が考えるように、これによって「言語進化の基本路線の段階的時代区分」の可能性という考えが取り下げられている訳ではない。

クリモフは1977年活格構造諸言語の類型学を専門的に扱った著書で、さらに大規模な資料に基づいて自説を展開している。過去に活格的文構造を具有していたことを示すいくつかの諸現象を残滓的な状態で保持する諸言語以外に分析対象となったのは、現実に同構造をもつ諸言語 (特に北米と南米のインディアン諸語) の諸事実である。活格構造が典型とする諸特徴の集合全体が、その共時態と通時態において検討されている。また活格構造の起源に関する問題が提起されている。すでに前著 (「能格性総論概説」1973年[2009年再版]—訳者) でなされた史的類型学的性格のいくつかの結論と帰結は、後著 (「活格構造言語の類型学」1977年[2009年再版]—訳者) ではさらに明確に定式化されている。

活格構造の研究史を取り扱った章の内容や、同じく基幹的問題群の解明に付随する多数の関連文献の引用は、先達の研究者達が言語諸特徴の体系的 (システムティック) な相関性の理解に如何に急接近していたかを示しているが、クリモフはそれら言語諸特徴を巧みに統合して、自己の活格構造構想の枠内に歴史的に位置づけたのである (「活格構造」という用語自体がどの程度適訳であるかは別にして。ただし、この用語自体はすでに確立済みである)。特にこのことは、最古の印欧祖語の状態の再構に関係しているのであるが、それにしても、クリモフが指摘しているように、活格構造の諸特徴集合体の諸断片は「伝統的な能格性理論のプリズム越しに」多くの人たちが観ていたことではある<sup>74</sup>。

今や広く認められるに至った活格的文構造理論の研究と共通印欧語の文法構造の歴史的進化の研究が繋がった現段階において確認できることは、まだ40年代の時期に、印欧語の早期段階に対してそれに対応する包含諸事象 (他動詞と自動詞の下での主体格の区別、特別能格[особый эргативный падеж]、動詞の他動性と非他動性範疇の対

<sup>74</sup> Климов Г.А. Типология языков активного строя. М., 1977, p.10.

(訳者—拙訳「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」,三省堂,1999.p.7)

立)をもつ能格構文を再構する試行に対して述べられた批判が正しいことである。印欧諸語の「能格的過去」説の論敵たちの諸研究(特に40年代の私の研究)において、印欧語のより早期状態の再構の基礎として取り出されたのは、古代印欧諸語の立証された歴史的構造における古体的(アーカイックな)諸事象の分析によって析出した全く別の諸特徴集合であった。それは、動詞の他動性と非他動性範疇(対立状態での)の後発的発達、この点での動詞語幹の中立性、代名詞分野にも及ぶ「能動」類と「受動」類(別様には、「有生」類と「無生」類)名詞の二項対立、対格(これに対しては原初的な状況・限定語的な意味を経由した過程が想定される)といわゆる不定格(casus indefinitus)との歴史的連関性、他若干の諸事実のような諸事象である。現在では、これらの諸特徴は、初期印欧語の構造を能格構造ではなく活格構造と認定するための示差的(relevant)特徴と認められる<sup>75</sup>。

**「反能格論者」と「能格論者」間論争の鎮静化** 一方、活格構造構想を印欧語の文法構造進化の古層段階に適用した研究が進むと、当時「反能格論者」と「能格論者」間でなされた喧々囂々たる苛烈な論争は事実上鎮静化してしまったのであるが、それは、能格論者たちがその具体的な諸研究において実質上、むしろ現在活格的文構造と定義されるものに適合するような「能格性」理解に到達していたからである。これは、もはやカツネリソンの初期主格構造の諸特徴の研究はもとより、彼が再構した能格構造の古層に完全に当てはまるものである。これは、グフマンやサフチェンコが、行為と状態の意義の対立を印欧語動詞の組織(システム)の発達の原点と見なす結論の基礎とした古代的ヴォイス(態)範疇の研究にも当てはまることである。

通時態における活格構造の諸事象の検討から、クリモフは、「活格構造再編には二系統のタイプが追跡でき、その内一つは『能格化』系統、もう一つは『主格化』系統と規定できる」こと<sup>76</sup>、また活格類型の、主格類型への歴史的再編の諸結果は、現在では印欧語族を含む少なくともいくつかの語族の事実資料を基にして見出すことができる、という重要な結論に至るのである。活格構造諸言語の進化の最も一般的な法則性の検討は、「その進化路線は、言語構造の諸要素を、主体原理と客体原理の対立に定立させる傾向を一貫して強めることに関連して敷かれて来たはずであり<sup>77</sup>、加えて

「能格化」系統も「主格化」系統も、原点の活格構造における主体・客体関係の表現諸特徴に一定の根拠がある、という結論に至らしめるのである。同時に、クリモフの学的スタンスとして特徴的なことは、存在する言語構造諸類型間の相関関係の史的類

<sup>75</sup> *Ibid.*, p.24. (訳者一同上, 拙訳 p.18.)

<sup>76</sup> *Ibid.*, p.172. (訳者一同上, 拙訳 p.142.)

<sup>77</sup> *Ibid.*, p.252. (訳者一同上, 拙訳 p.209.)

型学的な展望 (パースペクティヴ) を示す点で図式主義や過度の直線性を避けようとする傾向である。彼が予告していることであるが、「活格類型、能格類型、主格類型の歴史的隣接性という歴然たる事実を考慮するならば、おそらく活格類型が後二者に比して取り立てて古体的 (アーカイック) だとする根拠はないであろう」<sup>78</sup>。

クリモフが検討した、また検討中の活格構造構想は、印欧祖語文構造の能格性説のかつての同調者の側からも認められている。そこで、クリモフの活格構造説はヴァチェスラフ・イヴァノフによって受容され、すでに彼の諸著作において発展を見ている<sup>79</sup>。同説を支持する発言はグフマンも同様であり、彼女は類型学に関する近刊著で、次のように認めたのであった：「印欧諸語存立の再構対象となる最古段階から始まって、同諸語の発達を特徴づけるプロセスの史的類型学的解明にとって、活格構造の呼応諸特徴 (признаки-координаты [concord-features]) (クリモフの用語法による「包含事象」 [импликация (implication)]) の記述は、特別の意義をもったのである」<sup>80</sup>。

\* \* \*

**デスニツカヤの印欧語古層 (対格—補語—他動性) 研究の概要** 40年代に書いた拙論「印欧諸語における直接補語範疇の発達」の内容と論文構成は、すでに文証されている最古期状態における印欧諸語に特徴的な主格的文構造の生成過程を確定するという課題に沿ったものである。共通印欧語タイプの構造の発達における前主格期についての問題は、当時昂進的な関心の対象であり、私が選択を迫られていたのは、当時すでにほとんど伝統となっていた、この問題の「能格論者的」解決に与して、それを裏付けるべき何らかの新しい、より確かな論拠を探るべきか、それとも、こうした先入観に捉われた指針を斥けて、もう一度、印欧語タイプの主格構造にとって決定的な、主体・客体関係の表現図式の基本的諸要素の起源を探る研究に取り掛かるべきか、という問題であった。

能格説を裏付けるために引かれた論証装置全体がそもそもの初めから私には不完全に思われたから、私は後者の研究方向を選び、直接補語 (прямое дополнение [direct object]) 範疇に注意を集中したのであるが、同範疇には、他の統語構造タイプ特に能格構造と異なって、主格的文構造の特徴を決する文法的・意味的諸現象の系が焦点をめぐけるように集束していたのである。

<sup>78</sup> *Ibid.*, p.293. (訳者一同上、拙訳 p.244.)

<sup>79</sup> See: *Иванов Вяч. Вс.* 1) *Очерки по истории семиотики в СССР*. М., 1976, p.13-15; 2) *Славянский, балтийский, раннебалканский глагол. Индоевропейские истоки*. М., 1981, p.70-72; See also: *Активная типология языка и происхождение праиндоевропейских и глагольных парадигм.* – *Изв. ОЛЯ АН СССР*, 1981, № 2; 1982, № 1.

<sup>80</sup> *Гухман М.М.* *Историческая типология и проблема диахронических констант*, 1981, p.167.

印欧諸語はすでに文献によって立証された最古状態において、直接補語範疇を表す専用の文法形式—対格—を有していた。したがって、対格の起源に関する問題は当然主体・客体関係の主格的表現タイプの発展問題の解決が目指すべき方向性を決する鍵となる糸口であった。ところが、この問題は、文の主成分間の文法的諸関係の表現システムの歴史的発展に関する諸問題の集合全体から切り離しては研究することができなかった。直接補語の文法形式としての印欧語対格は、動詞における他動性—非他動性範疇やヴォイス（態）範疇も包摂する明確な文法範疇組織の連環を構成する要素の一つである。それ故、直接補語範疇の生成過程や形成過程の問題を研究する際に注意を向けるべきはこの諸現象の集合全体であり、特に動詞の他動性範疇の歴史的 성격に関する問題を解決すべきであって、印欧諸語にとってこの他動性範疇抜きには動詞述語に付く直接補語は考えられないのである。ある程度は研究の途上で、動詞述語そのものの生成過程に関する問題、とりわけその最も古体的（アーカイック）な形式のいくつかの痕跡に関する問題（名詞語幹と動詞語幹の歴史的相関関係に関する問題）も、言及することになった。

結果として、この研究で解明あるいは言及した問題領域は、その表題からイメージできるそれよりもやや広範囲に及ぶものであった。実を言えば、これは、当時多数の人たちを熱中させた能格図式の再構に対して、印欧諸語の前主格構造の全く別の構想を対置する試みであった。私はかつて主格文の発達のを構成した同諸語の古体的（アーカイック）タイプの統語構造の自分の再構に対しては、如何なる名称も提示してはいなかった。これはまだ主格構造ではなかったが、再構する構造が能格構造でないことは全く明らかであった。

統語構造の史的類型学的研究があらためて活発化して来ている現在では、また言語諸事実の広い展望に基づいてまたそれら諸事実に対するもはや先入観に因らない新しい理論的アプローチに基づいて、様々な語族や諸言語グループの主格的文構造や能格的文構造の発達にも先行した活格構造の概念が提起され、それがかなり確固とした論証を獲得している現在では、私が40年代に行なった研究の諸結果が基本的に、近年非常に活発に研究が始まった印欧諸語の構造の発達構想に合致することは、いまや明らかになりつつある。40年代から50年代初めにかけて私が発表した諸論文に提示したいくつかの命題が現実に反響を呼んでいることは、最新の関係文献に現れた、拙論に対する諸引用が証明している。

「印欧諸語における直接補語範疇の発達」の研究は、当時は未公開のままであった。上梓されたのは、同研究からのいくつかの抜粋にすぎない。同研究に提起された

諸問題への学的関心が復活してきたこと、またそこで定式化した諸命題のいくつかが印欧諸語の主格構造の起源問題の最新の諸研究の結果に一致することが明らかになったことに鑑みて、様々な時期の拙論から成る本書に、上記論文の中のいくつかの章節も収めてもよい（何の修正も補足も加えず、一部を短縮しただけで）と判断した。

公刊される諸章（私の研究の大体2分の1に当る）の内容が全体構想の構成要素であることを理解してもらえるように、私は、ソヴィエトの史的類型学研究のこの序論的概観（印欧諸語の主格構造の起源問題に当てた）を、かなり大部な論文（タイプ打ちテキストで674ページの）の主要内容の要約で締め括ることにする。同時に、この刊行に収まらなかった研究の諸部分の内容の方にやや意を用いることとする。

印欧諸語の文法構造の起源の諸問題の研究史とりわけ能格説を批判的に概観した序論部に続いて検討を加えたのは、筆者が展開した構想の内的論理に規定されて互いに相関関係にある諸問題の検討であった。研究は、名詞語幹と動詞語幹の始原的同一性に関する問題から始まった<sup>81</sup>。この問題の提起と解明は、1930-40年代の学的熱狂によって一動詞範疇の名詞起源に関するマールのテーゼ（決して彼のオリジナルではない）は勿論だが、なおそれ以上にポテブニヤの「原型名詞」«первообразное имя»説によって一極度に潤色されたものであった。尤も、後期の共通印欧語状態においては、動詞範疇はすでに完全に形成済みであり、画然と名詞範疇に対置されるものであったけれども、それ以前の早期状態に対してはこれらの範疇の分化過程の問題を排除する訳には行くまい。一般類型学的な観点からして、名詞語幹と動詞語幹の始原的一体性を推定するには十分な根拠がある。

上記の節の主たる論点は次の点に尽きる：名詞形と動詞形の組織（システム）における最古層の分析は、無テーマ型（*atheatic type*）とテーマ型（*thematic type*）の名詞語幹と動詞語幹の同一性を示している。始原的な動詞（無テーマ動詞とテーマ動詞）形成と並行して、それら動詞とは語源的には関係するがそこから派生するのではない無テーマ型とテーマ型の名詞語幹の組織体系（システム）が丸ごと存在しており、それらは意味的には行為名詞（*nomina actionis*）と行為者名詞（*nomina agentis*）として定義される。原初的にこれらの古代的名詞形は、恐らく行為一般の意義を表したのであろう。古代印欧諸語に残されている、動詞と結合する語根名詞の意味の分析は、*nomina actionis* 型の意義と分詞型（*nomina agentis*）の意義は必ずしもそれほど画然とは分化していなかったことを示している。一連多数の場合に現れるのは、二重的性格の

<sup>81</sup> See: Десницкая А.В. К вопросу о соотношении именных и глагольных основ в индоевропейских языках. – Учен. зап. ЛГУ. Сер. Филологич. Науки. Вып. 14, Л., 1949.

意義である。最も古体的（アーカイック）な名詞タイプの一つとしての語根の語幹は、行為名詞と行為者名詞が未分化であった古代的状态の痕跡を最大限に残したものであった。テーマ語幹にあっては、アクセント位置の交替（古代ギリシャ語や古代インド語における）が二つの主要意義—行為と行為者—の弁別手段として使われたのであるが、そのテーマ語幹もまた時には二重的解釈の可能性を示すのである。

古代から残されている、動詞的意義をもつ古体的（アーカイック）名詞タイプは、記述される構想によれば、かつて名詞範疇に対置される動詞範疇の形式化のための最初の素材となった先史期の名詞形の文法的意味について判断する可能性を与える。ただし、筆者が強調したように、研究者は、歴史的な諸言語の名詞的語形成システムにおいて一定の位置を占めた名詞タイプを、印欧祖語の最も早期の形態構造生成期に動詞範疇の形成のための原点となった「原型名詞」*«первообразное имя»*と同定するのは正しくない。

印欧語の形態構造前史へのこの補説（*excursus*）は、いくつかの印欧諸語にとって特徴的な古代的タイプの合成語の構成諸要素間の文法的・意味的な関係を再構するための基礎として研究に組み入れたのである。そのような名詞の第二部分であるのは、語源的に動詞と結合する名詞（行為者あるいは行為の意義を有する）であるが、第一部分は無徴的名詞語基である（ギリシャ語型 *δορυ-φόρος* 「槍-持ち」*«копьеносец»*, 露語 *ВОДО-ВОЗ* 「水-運搬人」, *сено-кос* 「草-刈り」）。

原則としてこうした種類の合成語形の個々のモデルの往古性を証明することが不可能であると認めつつも、筆者はタイプ（型）自体の起源は早期の印欧祖語の状態に求めることができると考えたのである。メッシャニーノフの諸研究における然るべき精査検討の影響を受け、また同研究に引用される古アジア諸語の諸資料との類型学的な類推に基づいて、上記の印欧語の合成語タイプは、述語的に用いる往古の抱合

（*incorporation*）的複合体の名残りとして解釈したのである。さらに続いて次のような結論を行なった：印欧語の合成語形の古体（アーカイック）層はタイプとしては、補語が未だ文の独立成分として分立されておらず、述語の限定語としてまだ分節を終えていない述語の構成要素に含まれていた時期に遡る。名詞の格形を作り出すための前提条件であった文の二次成分の分化は、最も遅い時期の語派生システムにすでに組み込まれつつも、ほとんど古体的（アーカイック）な諸特徴を残す古代的なタイプ語幹合成にも達していなかった<sup>82</sup>。

<sup>82</sup> 印欧語の合成語形における古体的（アーカイック）な諸特徴についての章は、1948年に発表した（*Десницкая А.В. Архаичные черты в индоевропейском слововложении. – Язык и мышление, т. XI. М.: Л, 1948*）. 印欧語の早期状態を再構するために非印欧諸語との類推を利用することで、それが 30-40年代

古代的な述語的複合体 (предикатный комплекс [predicative complex]) に起源をもつ、古体的 (アーカイック) なタイプに特徴的な無徴的名詞語基から成る名詞的合成語形の分析に続いて、研究の展開における次の一步となったのは、いわゆる不定格 (casus indefinitus) に関する問題の検討であった。この問題を解明するに当たって筆者が考慮したのは、ベートリンク (C. Böhtrink) <sup>83</sup> のヤクート語についての研究を初め、またグレンベフ (K. Grönbech) <sup>84</sup> の名著に記述された構想に特に注意を払った、チュルク諸語における不定格についての文献や、また同じく印欧諸語比較文法に関する諸著作に収集された資料であった。

ここに関係する諸事象の解釈の出発点となったのは、印欧祖語の文法構造の要素としての、述語的性格の抱合的複合体がかつて存在したという、上述の (古体的[アーカイック]タイプ) の合成語形についての問題に関連して) 仮説であるが、その複合体は時が経つにつれて次第に動詞述語とそれを補う名詞間の関係の分節した表現法をもつ文法構造に席を譲って行ったのである。次のような発達過程が想定された: 抱合が衰滅した結果生成して行ったのは次のような語法、つまり様々な状況語的機能

(обстоятельная функция [adverbial function]) を果す分化済み名詞形と並行して、なお抱合的述語複合体の構成要素からの分立があいまいな名詞語幹が残っており、それが行為の最近接の状況語的限定語 (обстоятельные определения [adverbial attributes]) ないしは状況語的補語 (обстоятельные дополнения [adverbial object]) — (チュルク語文法で casus indefinitus [不定格] という名称を得ているもの) — として顕れていた、と仮定して見れば、こうした状態の痕跡は印欧諸語に見出すことができるのである。かつて述語的複合体の中で使われていた状況語的限定語から転化した無徴的名詞語基を未だに残す語法と並行して、述語の最近接補語の表現手段としてすでに専用の名詞形が存在していたが、それにはすでに行為のより遠い補語の表現機能が備わっていたのである。印欧語形態組織の古 (archaic) 層に見出される不定格の痕跡のこの解釈は、印欧語名詞形形成の起源に関するバンヴェニストの研究の結論と一致したのであるが、同研究の著者は「統語的諸機能の集合総体」を詰め込んだ、異語幹屈折語 (heterocclisis)、古体的 (アーカイック) な所格 (locative) 形、副詞的形態形成の痕跡の意

---

ソヴィエトの比較・類型学的諸研究の典型的モデルとなっている。ただし、筆者は、具体的な言語資料を分析においては、アナクロニズムを避けることに努め、タイプのつまり構造モデルの再構に基づいてなされた個々の具体的諸例、諸用法の引用が条件的であることを一貫して強調した。

<sup>83</sup> Böhtrink C. Über die Sprache der Jakuten. – In: Middendorf, Beise in den äußersten Norden und Osten Sibiriens. C.-Пб., 1851.

<sup>84</sup> Grönbech K. Der türkische Sprachbau. I. Kopenhagen, 1936.

味分析を通して不定格の問題にアプローチしたのである<sup>85</sup>。

印欧語の過去に不定格範疇が存在したという比較言語学が認めた事実の解釈から対格の起源問題の解決に直結する道が拓かれたのである。またこのために必須だったことは、印欧祖語に存在した、名詞が表す事物と事象の「能動的」か「受動的」か、つまり「有生」的か「無生」的か、という性質に応じた名詞の二項分類に連係する諸事実を検討することであった。

論文の主要諸節は、ホメーロスの「イーリアス」の原本から対格の使用ケースを隙間なく連続的に抜粋した資料に基づいて、対格の古代的意義範囲を研究したものであり、同諸説では、対格の文法範疇の起源に関する問題—二項分類（能動性—受動性）や、不定格範疇の残滓（形態面と意味面における）を勘案しながら—の解決が進み、さらにまた、動詞の他動性—非他動性範疇の歴史的な性格や同範疇の発達が相対的に後発的であることも証明された—これらの諸節は全て本書に収められ、加えて、構想全体にとって要の意義をもつ対格の意義に関する章は初めて発表するものである<sup>86</sup>。

したがって、古代ゲルマン語の与格補語（объективный дательный [objective dative]）を論じたここに発表する最終章論文と同様、上記の研究部分の内容はここに述べる必要はない。それ故に、印欧諸語文法構造の類型的発展構想の概観は、印欧語文法構造の初期段階（クリモフの定義による「活格構造」）の、主格段階への具体的な再編過程の問題に関係する私の研究の基本テーゼの一つを引くことで締めくくりにする。

「古代的な意識による森羅万象（все предметы и явления）の質的評価に基づく名詞の二項分類は、それら森羅万象の重要性の観点から、また森羅万象を表す名詞が文において主体機能でも客体機能でも登場し得る特別な性質を具有するという観点から、印欧語の最古状態における主体・客体的図式の発達における出発点であった。この分類は、潜在的に『主体』能力をもつ類（クラス）に専用化した、起源的には代名詞的の主体形態素 *-s* の成立に標示された。一方、「客体」類としても「主体」類としても働く非主体的機能として現れていたのが、無徴的名詞語基である。ただし、この時代に対してこの形の客体的意義を示すのは早計である。この形が述語に与えられた特徴の限定辞機能で登場していた述語的複合体の中から徐々に分離されつつ、時を経てようやく自立した文の二次成分に転化し、補語（дополнение [object]）になって行くのである。長期に亘って無徴的名詞語基のすなわちいわゆる不定格（casus indefinitus）の優勢

<sup>85</sup> Benveniste E. *Origins de la formation des noms en indoeuropéen*. Paris, 1935, p.95.

<sup>86</sup> 同章の基本的論点は報告大要の形で定式化した一次の書に所収：1947年2月17-19日マール記念言語と思考研究所25周年学術定例会議 報告大要、モスクワ、1947。（В кн.: Научн. сессия, посвященная 25-летию Ин-та языка и мышления им. Н.Я.Марра. 17-19 февраля 1947 г. Тезисы докладов. М., 1947.）

的な意義であったのは、状況・限定語的な性格の意義であって客体的意義ではなく、そのことは、古代印欧諸語の対格がもつかなり広い状況語的機能の存在に残滓的に保存されている」<sup>87</sup>。

(以上、小見出しとゴシック文字は訳者によるもので、原文にはない)

---

<sup>87</sup> Десницкая А.В. Развитие категории прямого дополнения в индоевропейских языках. Тезисы докторской диссертации. Институт языкознания. Л., 1946. Машинописный текст. с. 5. (A.V.デスニツカヤ「印欧諸語における直接補語範疇の発展 博士論文大要」, 言語学研究所, 1946, タイプライター・テキスト, p.5.)